ISSN 0027-9153

国立国会図書館月報

稀本あれこれ－466－ 「やよひのうた」中島広足自筆『後夢路日記』所収
図書館－知識情報社会の原動力－ 世界図書館情報会議
－第72回国際図書館連盟（IFLA）大会 その2 ・1
第33回国立図書館長会議 グローバルな連携を強化する
－情報電子化の進展と国立図書館－ ＝生原 至剛 ・4
議会図書館分科会および法律図書館分科会
立法情報サービスの現在 ＝戸田 典子 芦田 淳 ・8
資料保存分科会関係会議、IFLA／PAC センター長会議
資料保存の現状を知り、対策を選択する ＝齋藤 友紀子 ・10
目録・書誌情報関係会議
アジアからの声を ＝原井 直子 横山 幸雄 ・13
子ども・ヤングアダルト図書館分科会
家族をつなぐ読書－架け橋としての図書館 ＝石渡 裕子 ・16
国立図書館分科会
国立図書館 知識社会のダイナミックなパートナー ＝植月 献二 ・19
政府機関図書館分科会
顧客ニーズ 政府機関図書館・情報センター変革の原動力
＝ローラー ミカ ・20
新聞分科会 東アジアにおける新聞 ＝堀越 敬祐 ・21
地誌・地図図書館分科会 どちらの名前か？ 場所の地理的な命名
＝樋山 千冬 ・22
IFLA 展示会 ・23
ソウル点描 ・7, 18
平成18年度国立国会図書館長と大学図書館長との懇談会について ・26

館内スコープ ・25
本屋にない本 ・28
NDL news ・30
国立国会図書館の編集・刊行物 ・30
関西館の資料紹介 (12) ・42
『国立国会図書館月報』年間索引 ・53
ビジュアル国立国会図書館博物館 (8) ・54

＜お知らせ＞
特別展示「旧帝国図書館建築100周年記念展示会」 ・25
年末年始のサービス休止について ・34
国際子ども図書館展示会「大空を見上げたら－太陽、月、星の本」の開催について ・35
国際子ども図書館 学校図書館セット貸出し「世界を知るセット」
（小学校高学年向）の貸出開始について ・36
NACSIS-ILL 経由・総合目録ネットワーク経由の複写・貸出しの申込中止について ・36
NDL-OPAC のインターネットサービス時間延長 ・37
＜ご案内＞
平成18年度レファレンス研修 ・37

12 2006 No.549

国立国会図書館利用案内

東京本館　〒100-8924　東京都千代田区永田町1－10－1
電話　03（3581）2331
利用案内　電話　03（3506）3300（音声サービス）
電話　03（3506）3301（FAX サービス）

関 西 館　〒619-0287　京都府相楽郡精華町精華台8－1－3
電話　0774（98）1200（音声サービス）
利用案内　電話　0774（98）1212（FAX サービス）

ホームページ　http://www.ndl.go.jp/

利用できる人　満18歳以上の方
資料の利用　館内利用のみ。館外への帯出はできません。
開　館　日　月曜日から土曜日
休　館　日　日曜日、国民の祝日・休日、年末年始（**34頁参照**）、資料整理休館日（第 3 水曜日）
所 蔵 資 料　当館の所蔵資料は、納本、購入、国際交換、寄贈等によって収集され、東京本館、関西館、国際子ども図書館に分散して配置されています。

＜東京本館のおもな資料＞和洋の図書、和雑誌、洋雑誌（年刊誌、モノグラフシリーズの一部）、和洋の新聞、各専門室資料
＜関西館のおもな資料＞和図書・和雑誌・新聞の一部、洋雑誌、アジア言語資料・アジア関係資料（図書、雑誌、新聞）、科学技術関係資料、文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書、博士論文

東京本館のサービス時間

開 館 時 間　月～金曜日　9:30～19:00　土曜日　9:30～17:00
※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室、古典籍資料室の開室時間は17:00までです。
資料請求時間　月～金曜日　9:30～18:00　土曜日　9:30～16:00
※ただし、音楽・映像資料室、人文総合情報室特別コレクション、憲政資料室および古典籍資料室の資料請求時間は16:00までです。
即 日 複 写 受 付　月～金曜日　10:00～18:00　土曜日　10:00～16:00
後 日 複 写 受 付　月～金曜日　10:00～18:30　土曜日　10:00～16:30
オンライン複写受付　月～金曜日　10:00～17:30　土曜日　10:00～15:30

関西館のサービス時間

開 館 時 間　10:00～18:00
資料請求時間　10:00～17:15
セルフ複写受付　10:00～17:30
即 日 複 写 受 付　10:00～17:00
後 日 複 写 受 付　10:00～17:45
オンライン複写受付　10:00～17:00

※詳しくは当館ホームページをご覧ください。

稀本あれこれ

「やよひのうた」　中島広足自筆『後夢路日記』所収

『中島広足全集』第１編
（当館請求記号652－３）所収

「やよひのうた」　中島広足自筆『後夢路日記』所収

やよひのうた
あはれいかに　かくおもしろき
あはれいかに　かくおもしろき
名にしおふ　春のやよひは
いろいろの　小草もえ出で
さまざまの　花咲き匂ひ
木々はみな　若葉さしつゝ
のどかなる　風吹きわたり
あげまきの　うたふ末野の
ひつじさへ　高くなくなり
あはれいかに　かくおもしろき
あはれいかに　かくおもしろき
春のやよひは

MAILIED
O wie schön, wie schön ist der Mai!
Gras und Blumen wachsen,
Bäume haben Blätter,
Sanfte Winde wehen,
Stiere gehn und weiden,
Junge Lämmer blöken,
O wie schön, wie schön ist der Mai!

西洋詩翻訳の最初というと明治の新体詩を連想する方が多いかもしれない。しかし、西洋詩の翻訳は、江戸時代にもわずかながら行われていた。上記は、そのわずかな試みのひとつ、「西詩翻訳の嚆矢」として知られるものである。

この詩を翻訳した中島広足（1792―1864）は熊本生まれの国学者・歌人。文政５（1822）年31歳で初めて長崎を訪問。以来30余年間、長崎を第二の故郷として活躍し長崎の国学をリードした。当時の長崎は西洋との唯一の窓口であり、広足はすでに洋傘を持ち肖像写真（**口絵写真**）を撮影している異色の国学者でもあった。この翻訳は文政６（1823）年、２回目の長崎訪問の折、オランダ通詞の猪股久蔭に「阿蘭陀国風詩」を「こゝの詞にうつしてよ」と請われ、意味を説明されて訳したという。原詩は長らく不明であったが、石本岩根「中島広足訳「やよひの歌」について」（『比較文学』６巻　1963）が「阿蘭陀国風詩」とは当時のいわゆる山オランダ語、すなわちドイツ語の詩であり、原作者はMatthias Claudius（1740―1815）と突き止めた。上記は第1節のみであるが、全4節あり、広足は第２節をも「又おなじこゝろのうた」として訳出している。オランダ通詞の猪股がドイツ語の詩を入手し翻訳を思い立った事情は不明であるが、猪股のドイツ語学習のテキストであった可能性もある。

広足の翻訳をみると、伝統的な長歌の定型によりながらも、「あはれいかに・・」という歌い出しとリフレインには明治の新体詩に通じる新しさも感じられる。題名のMAILIED（五月）を「やよひのうた」と訳したのは、彼我の暦の違いを考慮したためという。“Stiere gehn und weiden”の一行が抜けたほかは、ほぼ忠実に訳されており、言葉の調べと意味を両立させた巧みな訳詩といえる。

しかしながら、この後、広足が西洋詩翻訳を再び試みることは無く、約60年後の明治15年、外山正一らによる翻訳詩集『新体詩抄』が日本の近代詩の幕開けを告げることになる。この「やよひのうた」は大正11年広足の研究者であった弥富破摩雄が紹介して注目を浴びるまで、広足自筆の『後夢路日記』に記されたまま出版されることも無く、ひっそりと伝えられてきた。（当館請求記号：915.5-N568n）

（上田由紀美（うえだ ゆきみ））

図書館―知識情報社会の原動力

世界図書館情報会議―第72回国際図書館連盟（IFLA）大会　その２

二〇〇六年八月二〇日から二四日まで、韓国ソウル（会場：ＣＯＥＸ会議・展示センターほか）で、「世界図書館情報会議―第七二回国際図書館連盟（ＩＦＬＡ）大会」が開催された。今大会のテーマは「図書館―知識情報社会の原動力」であった。一二四か国から全日程参加者二、八九一名、一日単位の参加者四四七名、展示見学者五二二名があり、初めての参加者は九三一名であった（今大会から統計の方式が変更された）。日本からの参加者は韓国（一、三六七名）、米国（三六六名）、中国（二三三名）に次ぐ二二八名であった。当館からも生原至剛副館長を団長とする派遣団一八名が参加した（表）派遣団名簿参照）。

当館は一九六六年ＩＦＬＡ準会員に、一九七六年に会員になって以来、様々にＩＦＬＡの活動に協力してきた。これは財政面に留まるものではない。現在、子ども・ヤングアダルト図書館分科会、書誌分科会、資料保存分科会の常任委員会委員が当館から選出されており、また議会図書館分科会等の分科会やＵＮＩＭＡＲＣ常設委員会の連絡委員も務めている。さらに、当館はＩＦＬＡのコア活動の一つである資料保存コア活動（ＰＡＣ）のアジア地域センターに指定され活動を行っている。今大会もこれらの分科会等を中心に各種会合に参加し、この他に、国立図書館分科会、政府機関図書館分科会、新聞分科会でもペーパー発表を行った。また日本図書館協会、国立情報学研究所、科学技術振興機構と並んで展示ブースを出展、資料保存と電子図書館をテーマに当館の活動について広報を行った。

また、大会期間中の二三日に「第三三回国立図書館長会議（ＣＤＮＬ）」が韓国国立中央図書館（ソウル）において開催され、生原副館長が黒澤隆雄館長の代理として出席した。

本号ではこれらの会合の模様を報告するとともに、「ソウル点描」と題して、ソウル滞在中に団員が見聞したこと、印象に残ったことを様々な視点から紹介したい。「館内スコープ」でもＩＦＬＡ展示会を取り上げているので、併せてご覧いただければ幸いである。なお、前号ではその１としてプレコンファレンス等を紹介した。

[派遣団名簿]

生原　至剛	（副館長　団長）
戸田　典子	（調査及び立法考査局社会労働調査室主幹）
齋藤　友紀子	（収集部司書監）
植月　献二	（総務部企画課電子情報企画室長）
大曲　薫	（収集部主任司書）
原井　直子	（書誌部国内図書課長）
北川　知子	（主題情報部主任司書）
石川　武敏	（関西館資料部アジア情報課長）
石渡　裕子	（国際子ども図書館児童サービス課長）
樋山　千冬	（総務部総務課課長補佐）
ローラーミカ	（総務部支部図書館・協力課課長補佐）
関根　美穂	（総務部支部図書館・協力課課長補佐）
芦田　淳	（調査及び立法考査局調査企画課課長補佐）
横山　幸雄	（書誌部書誌調整課課長補佐）
堀越　敬祐	（主題情報部新聞課課長補佐）
原田　圭子	（関西館事業部図書館協力課課長補佐）
松井　一子	（総務部総務課広報係長）
石塚　陽子	（資料提供部電子資料課副主査）

本大会

二〇日の開会式ではクォン・ヤンスク韓国大統領夫人・大会名誉会長が祝辞を述べ、キム・デジュン前大統領が基調講演を行った。二〇〇を超える分科会セッションその他の会合が行われ、三八二本のペーパーが提出された。二四日の閉会式では二〇〇九年の第七五回大会がミラノ（イタリア）で開催されることが発表された。二〇〇七年はダーバン（南アフリカ共和国）、二〇〇八年はケベック（カナダ）で開催されることになっている。

IFLA評議会

評議会は例年、大会初日と最終日の二回開かれてきたが、今回は最終日閉会式後一回の開催であった。IFLA本部としては、とくに支障がなければ今後も一回開催としたい意向のようである。

一　会長報告・年次報告

評議会の冒頭、アレックス・バーンIFLA会長による会長報告およびピーター・ローIFLA事務局長による年次報告があった。要点は以下のとおりである。

・IFLA会員国数はピーク時の一五七か国から一四七か国に減少している。国連加盟国数一九二か国を目標に増やしたい。また、IFLAの収入源が会員費に頼りすぎているきらいがあるので、IFLAファンドを創設し、

また法人会友などを増やすことによって財政基盤を強化したい。ちなみに総収入の四二％は会員費、三九％が寄付・援助金となっている。

・財政基盤強化のためには会員数、協会会員数を増やす必要がある一方、各国の国立図書館にはコア活動分担金の増額を要請したい。

・ＩＦＬＡの公用語は現在、英・仏・独・西・露の五か国語であるが、これに二〇〇六年から中国語、二〇〇七年からアラビア語を加える。ＩＦＬＡの活動をより広く世界に広めるためである。

主会場の COEX 会議・展示センター（右）
開会式風景（左）

二　規約改正に関する提案

ＩＦＬＡ事務局は評議会に先立って、①二〇〇四年の評議会において承認された「その他の協会会員」の投票権の承認、②「その他の協会会員」の導入に伴う評議会の定足数に係る規定の整理、③評議会開催通知の送付に必要な時間の短縮、を内容とする提案をしていた。その際、採決は郵送投票によることとしていたので、当評議会においてはその結果が報告された。それによると、郵送投票送付数一、二六五票に対して投票数二九九票（投票率二四％）であり、①について賛成九八％、②について賛成九五％、③について賛成九八％となり、三案とも可決された。

三　インフレによる会費の値上げに係る提案

ＩＦＬＡ事務局長は評議会に対し、ＩＦＬＡ会費の値上げ幅に関する規定を、現行「金額は、過去一二か月（ＩＦＬＡ本部のある）オランダ政府により記録された公式小売物価インフレ率より一％低い数値を上回らないこと。」から、「金額は、前回の値上げ以降、オランダ政府により記録された公式小売物価インフレ率を上回らないこと。」に改正することを提案した。すなわち、値上げ幅の一％制限枠を撤廃しようとするものであるが、オランダの物価上昇率が実質二％前後である現状にかんがみ、全会一致で承認された。

（国立国会図書館ＩＦＬＡ
ソウル大会派遣団）

第三三回国立図書館長会議

グローバルな連携を強化する ――情報電子化の進展と国立図書館――

生原至剛

ＩＦＬＡ大会の会場となった江南区（ガンナムグ）のＣＯＥＸ国際会議場からバスで南西に向かって約三〇分、瑞草区（ソチョグ）に韓国国立中央図書館がある。第三三回国立図書館長会議（以下、ＣＤＮＬ）は八月二三日、その韓国国立中央図書館を会場として開かれた。

出席者は、事務局によると暫定的な数であるが七六名、五〇か国以上、六機関の参加であった。アジアからの参加国・地域は、日本と主催国の韓国のほか、ブータン、中国、モンゴル、ネパール、パキスタン、フィリピン、シンガポール、スリランカ、タイ、台湾、ヴェトナム等であった。オスロで開催された昨年はアジアからの参加は五か国であったというから、ソウルでの開催であったため、アジア諸国にとっては参加しやすかったということであろうか。とりわけＣＤＮＬ初参加の台湾国家図書館の存在が筆者の目を引いた。

会議はデンマーク王立図書館長エアラント・ニールセンＣＤＮＬ第一副議長の司会により開会され、冒頭、韓国文化観光省副大臣ヨ・ジンリョン氏の歓迎の辞があった。

韓国国立中央図書館長（左）と筆者

役員の選任

第三一回のＣＤＮＬ（二〇〇四年ブエノスアイレス）で議長に選任されたセリア・ザヘア氏が今年に入ってブラジル国立図書館長の職を辞したことから、午後の部の冒頭、役員の補欠選挙を行った。その結果、ＣＤＮＬの新議長にニュージーランド国立図書館長ペニー・カーナビー氏が、

第二副議長に南アフリカ国立図書館長ジョン・ツェーベ氏が選任された。第一副議長は引き続きエアラント・ニールセン館長が務める。

おもな報告

事前の予告では、米国議会図書館副館長ディアナ・マーカム氏『視聴覚資料の保存―議会図書館の国立視聴覚資料保存センター』ほか四件の報告が予定されていた。

しかし、オーストラリア国立図書館長ジャン・フラートン氏のプレゼンテーションは事前にペーパーが配布されていたため割愛され、マーカム氏も五分以内の短い発表となったのでここでの紹介は省略する。

各報告について筆者の印象に残った論点をいくつか紹介したい。

『二一世紀の図書館像』

英国図書館長　リン・ブリンドリー氏

・これからの図書館がなすべきことは何よりも利用者層に応じたニーズを的確に把握し、ニーズに応じたサービスを適時的確に提供することである。そのためには図書館もマーケティング・リサーチの手法を取り入れる必要がある。

・図書館員はより広い舞台で図書館情報専門家としての専門性を発揮し、社会に対し存在感を示す必要がある。例えば、デジタル時代における著作権・知的財産権に係る論争においても、図書館は公衆の利益を代弁すべきである。商業ビジネスの利益に偏るべきではなく、利用者の利益とのバランスをとることが重要である。また、今日、テロ対策との係わりのなかで議論されることの多い表現の自由、情報公開などの問題に関しても図書館人は個人の人権を守る、表現の自由を守るという立場から発言する職業的責任があるのではないか。

『欧州デジタル図書館―基本的な考え方』

フランス国立図書館長　ジャン―ノエル・ジャヌネ氏

・「欧州デジタル図書館（ＥＤＬ）」の基本的なスタンスはヨーロッパの文化的多様性を大事に育てるものでなければならないと考えている。アメリカを批判するつもりはないが、世界がアメリカン・カルチャー一色に染まるのは良くない（文化的覇権主義、文化的モノポリー）。ヨーロッパ、ラテン・アメリカ等々、北米以外の地域の文化的多様性を大切にすべきである。

・同様に、言語に対しても多言語主義を尊重しなければならない。英語やフランス語だけが言語ではない。どの言語も同等の価値をもっている。

・民間企業が図書館の事業にさまざまな支援を申し出ることが珍しくなくなったが、支援は財政支援にとどめるべきであり、民間企業のためのプロジェクトになってはいけない。メタデータも図書館が所有者であって、民間企

業であってはならない。

・フランスは膨大な文化遺産を有しているため何をデジタル化するか、選択基準の策定が必要。英国図書館とも協議したいと思うが、ヨーロッパの人と文化をよく伝えるものが良いのではないかと思う。

ＥＤＬは、二〇〇五年九月、欧州委員会（ＥＣ）がGoogleに対抗して構想したプロジェクトであるが、アメリカ側から、そして民間企業の立場から世界的なデジタル図書館の構築に乗り出したGoogleに対し、いち早く「ノン」の声を挙げ、実質的にＥＤＬ構想を提唱したのはこのジャヌネ氏であった。

『過去は未来へのプロローグ―二一世紀の図書館公文書館サービス』

カナダ図書館公文書館長　イアン・ウィルソン氏

ウィルソン氏の発表は、統合して二年になるカナダ図書館公文書館の現状報告であり、あらためて統合の正当性を指摘したものであったが、一方、統合は、図書館といい、公文書館といい、すでに膨大な蔵書と大きな組織を抱えている大国向きのモデルではないかもしれないが、限られた資源を集約的に活用するという意味で発展途上国には参考になるのではないかとも語っていた。

これと関連して、ケベック州でも今年に入って、州立図書館と公文書館が統合したことが報告された。

討　議

報告に引き続き、（一）ＣＤＮＬの組織運営、（二）ＣＤＮＬとして取り組むべき課題、について議論した。

（一）については、ニールセン第一副議長からＣＤＮＬ規約を改正して理事会（Ｂｏａｒｄ）を新設することが提案された。また、副議長を五～八名とし、その内四名はＣＤＮＬの地域会議議長をあてる。中東、アフリカ、アジア、北米などの地域からも幅広く副議長を選出するという案も示された。これはまだニールセン第一副議長の私案ともいうべきもので、来年の会合までには案を固めて正式に提案するということであった。

（二）について、ニールセン第一副議長はウェブ・アーカイヴィングのための国際協力を提案して、参加者の意見を徴し、来年の会合に先立ち各国国立図書館にアンケートを送付する意向を表明した。またニュージーランド国立図書館カーナビー館長が今後数年間のＣＤＮＬの取り組むべきテーマについて自由な議論を促し、各国から様々な発言があった。国によってはまだアーカイビング技術自体がなく、資料のマイクロ化の方が切実な課題である、という意見もあった（ブータン）が、ウェブ・アーカイビングが今後のＣＤＮＬのメイン・テーマの一つになる可能性は高い。

（いくはら　よしたか　副館長）

ソウル点描 1

韓国国立中央図書館訪問

ライブラリー・ツアーで国立中央図書館を訪問した。同館は、ここのところ急速に情報の電子化を推進していて、現在敷地内に「国立デジタル図書館」を建設中である（二〇〇八年開館予定）。紹介ビデオも「国立デジタル図書館」構想の解説と将来像が中心であった。

「国立デジタル図書館」の「蔵書」の核の一つはウェブ・アーカイブで、現在一〇〇万ドルをかけて「OASIS」プロジェクトを推進しているとのことである（二〇〇五年―二〇〇六年）。OASISはウェブ上の情報を、選択的に著作単位とサイト単位で集めるもので、韓国に関するもの、韓国人が著者であるものを収集している。

ソウル市街を走る自動車は、たまにドイツ車をみかける程度でほとんどが韓国製である。技術力と国民の勤勉さが韓国の強さではないか。その技術力と勤勉さの基礎になっているのは、図書館を初めとする教育・研究のインフラで、そこから生まれる優秀な人材が韓国の経済と社会を支えているように思う。短いソウル滞在だったが、韓国では国レベルで知識・情報基盤を整備し、人材を育成するという戦略があるように肌で感じた。

（大曲　薫）

ソウルのタクシー

ソウル市内にはあふれるほどの車が走っている。これが昼夜を問わず交通渋滞を引き起こしているのだが、地下鉄の駅から歩くには遠いときや団体で行動するときはタクシーやバスに乗ることになる。大会の会期を終える頃には、英語漬けから瞬時抜け出て、街中のハングルで記された看板や漢江に映る夜景を見つめ、ひと時の「韓国気分」を味わう余裕も出てきた。

さて、タクシーにそんなに長時間乗ると日本の場合は料金が気になるところだが、運賃が安価なのが嬉しい。複数人で乗車すれば地下鉄よりも安くなることがある。ところがホテルからIFLA会場のCOEXまでと同じ距離であるにもかかわらず、屋根上の表示灯が黄色の「模範タクシー」と、白の「一般タクシー」では倍近く料金が異なる。一般タクシーは初乗り2キロまでは一、九〇〇ウォン（約一三〇円）。白の表示灯目掛けて手をあげ、ドアが手動なので、注意されずとも開け閉めを自分で行うようになるまでにそう時間はかからなかった。

（石渡裕子）

IFLA大会と情報産業

大会会場では運営に携わるボランティアの方々のスタッフベストにX社と書かれていたことに驚いた。X社は、電子ジャーナルの世界では有名な会社である。会場では情報産業の関係者も数多く見かけた。図書館と情報産業は、共存共栄していくべきなのだろうが、現実にはそれほどいい関係とは言えない。

私が出席した分科会は、この図書館と情報産業との対立の構図があからさまに出ることになった。まず、電子になっても価格は下がらない、ILLも認めないといったE-books購読契約の問題点について報告があり、その後にE-booksの現状を報告した販売側Y社には、各国の図書館から、なぜこんなに高いのかといった質問というよりも不満が噴出した。司会者が、両者の合意可能な「ビジネスモデル」が必要とまとめたが、各国の図書館が異口同音に情報産業への不満を口にする様は問題の根の深さを実感させるのに十分であった。図書館と情報産業との価格や利用条件をめぐる大きな溝、一方で会場での情報産業の存在感、この奇妙な対立と協調の関係が現状を映しだしているように思われた。

（大曲　薫）

議会図書館分科会および法律図書館分科会

立法情報サービスの現在

戸田典子・芦田淳

今回は、従来参加してきた議会のための図書館および調査サービス分科会（通称「議会図書館分科会」）に加え、法律図書館分科会にも参加した。法律図書館分科会は、昨年一二月に設置され、大会前に当館に会合への参加を求める書簡が寄せられていた。

I　プレコンファレンス

議会図書館分科会は、本大会直前の八月一六日から一八日までの三日間、プレコンファレンスを開催した。第二二回目となる分科会の統一テーマは「立法情報サービスの役割－非対称的情報と不確実性を超えて」で、約三〇か国・七〇名の出席者があった。開催場所の憲政記念館は、国会の敷地内にあり、戦後五〇年にわたる韓国政治の歩みにちなんだ展示がなされ、各国から集まった議会図書館関係者が議論を行うにふさわしい会場であった。

一六日は、韓国国会図書館長のあいさつで開会し、まず韓国の与野党の国会議員一名ずつから、議会における情報サービスのあり方について報告が行われた。そこで力説されたのは、当該サービスに関して、専門家とのより幅広いネットワークを形成すべきこと、行政側の膨大な情報から重要な情報を選別する機能を深めるべきことである。午後は各立法補佐機関から、その組織・サービスの概要に加え、現在取り組んでいる課題が説明された。翌日は、韓国国会図書館から、立法情報サービス全般と、デジタル・ライブラリー構築・ウェブ情報収集に係る取組みについて詳細な報告が行われ、調査依頼の増加や、利用者の満足度を高めるためには面談しての説明を必要とするなど、国を異にするものの国会サービスの共通性がうかがわれた。続いて、三日目の「リサーチ・デイ」に開催された以下の四セッションでは、各国の出席者が報告を行い、質疑や意見交換が活発に行われた。第一セッションは、議会図書館内での調査員と図書館員との協働の有無がテーマである。報告の中でD・マルホラン氏（米国議会図書館）が述べた情報提供サービス部門の再組織化は、当館にとっても興味深い内容であった。第二セッションは、調査サービスの進化というテーマで、調査成果に対する反応をどのように得るかの報告が行われた。第三セッションでは、ウガンダ議会図書館から、設置から日の浅い議会調査部門の視点に立って、不偏不党等の課題の実践について熱のこもった説明があった。第四セッションでは、イラン、ギリシア、日本、ベルギーの代表が、調査サービスの最近の動向を報告した。芦田は、当館の国会サービスの現状、昨

年度実施した議員要望調査の概要、その調査結果をふまえた国会サービス改善の取組みについて報告した（**前ページ写真**）。参加者からは、報告の中で触れた当館調査及び立法考査局が行う情報提供サービス、専門性を持った調査員育成の方法について特に関心が示された。

Ⅱ　本大会

（一）常任委員会

八月一九日、議会図書館分科会の常任委員会が開かれ、各地域の動向、次年度以降の開催予定等が議論された。来年八月一九日から二三日にかけて南アフリカ共和国で開催される次大会については、同国議会図書館の代表から具体的な提案が出され、検討が行われた。また、同日、法律図書館分科会の常任委員会にも出席した。分科会の代表のH・クヌートセン氏（国際法律図書館協会前会長・マックスプランク外国国際私法研究所）からは、分科会設置までの活動について熱心な説明があった。同氏からは、当館として分科会にメンバー登録することを強く求められたが、現時点では検討する旨を伝えるにとどめた。

韓国国会議事堂にて
議会図書館分科会メンバーとともに

（二）セッションおよびワークショップ

議会図書館分科会に関しては、二一日、午前から午後にまたがる三部構成の官庁出版物分科会との合同セッションに出席した。そのテーマは、政府情報と官庁出版物に係る議会のための図書館および情報サービスで、議会図書館分科会参加者側からは、チェコ、スロヴァキア、ウェールズ、ロシアの各議会図書館と列国議会同盟議会情報センターの代表が報告を行った。二三日には議会図書館分科会のワークショップが開かれた。ここでは全員を四つのグループに分け、グループを変えながら、各参加者が三つのセッションに参加し、最後に総括討論を行った。各セッションは一五名程度であったため、リサーチ・デイよりさらに緊密な意見交換が行われた。こうしたワークショップやプレコンファレンスへの参加を通じて、各国議会に根差した議会図書館分科会は存在基盤が強固であること、先に述べたマルホラン氏やD・シーダー氏（米国議会図書館）をはじめとする熱心なコア・メンバーに恵まれていることを改めて感じさせられた。議会図書館分科会は、今後も活発な活動を継続していくであろう。

また、二二日午前には、法律図書館分科会のセッションに参加した。アメリカ法律図書館協会のS・フォックス氏の講演があり、特にアジアの関係者から熱心な質問があった。しかし、参加者は十数名にとどまり、過去四年間の準備会合の参加者を相当下回っているとのことで、同分科会の存続には今後の努力が必要であろうことが察せられた。

（とだ　のりこ　調査及び立法考査局社会労働調査室主幹）
（あしだ　じゅん　調査及び立法考査局調査企画課課長補佐）

資料保存分科会関係会議、ＩＦＬＡ／ＰＡＣセンター長会議

資料保存の現状を知り、対策を選択する

齋藤友紀子

資料保存分科会常任委員会

一六・一七日の東京でのプレコンファレンス（以下「プレコン」。詳細については本誌五四八（二〇〇六年一一月）号参照。）終了後、ソウルに飛び、一九日および二五日に開かれた常任委員会に参加した。出席者は二〇人前後で、分科会の常任委員・連絡委員の他、ＩＦＬＡ／ＰＡＣ（資料保存コア活動、以下ＰＡＣ）国際センター長などがオブザーバーとして参加した。

資料保存文科会常任委員会
（正面がグウィン委員長、右がクルヘド事務局長）

おもな議題は、ソウル大会の資料保存関係プログラムの紹介、来春の資料保存分科会常任委員会・ＰＡＣセンター長合同会議の提案、来年以降の年次大会のセッションおよびプレコンの企画・運営であった。

ソウル大会プレコン「アジアにおける資料保存」については、当館が企画・運営を担当したため、筆者が概略を報告するとともに、展示会場の当館ブースでの資料保存関係展示について案内した。プレコンに参加した委員・オブザーバーから、出席者も多く、充実したよい会議であったと嬉しいコメントをいただいた。

合同会議については、スウェーデン国立図書館で開催されるヨーロッパ研究図書館連盟（ＬＩＢＥＲ）保存部門主催の会議に合わせて、五月末にウプサラ大学図書館で開催されることに決まった。

論議の多くは、来年のダーバン大会の企画・運営に費やされた。プレコンは埃、カビ、害虫等の環境管理をテーマとし、セッションはアフリカ文化遺産の保存に特化することになったが、講師選定や資金調達など、まだまだ課題が残っている。二〇〇八年ケベック大会については、カナダ国立図書館・文書館からオタワでのプレコンおよび施設見学について説明があった。

そのほか、委員会が維持・管理している保存関係規格・ガイドライン一覧―ＦＩＲＳＴ、ＤＯ　ＮＯ　ＨＡＲＭ―の更新とデータベース化や、デジタル保存に対する分科会の今後の取組みについて話し合われた。

また、二三日午後には、常任委員の一人である韓国国立中央図書館（ＮＬＫ）資料保存担当事務官のイ・キボク氏がメンバーのために企画したＮＬＫ見学ツアーに参加した。

NLKは二〇〇〇年八月に資料保存館を建設、二〇〇二年には保存専門家二名を雇用し、資料保存への取組みを強化している。資料保存館は書庫、修理・復元室、マイクロ保存処置室のほか、燻蒸消毒室や脱酸処理室も備えており設備面での充実ぶりが印象に残った。脱酸処理室には資料の埃を取るための車体洗浄装置に似た仕組みの機械（写真下）も設置されていた。

IFLA／PACセンター長会議

二二日午後に開かれたセンター長会議には、国際センターを含む一二の地域センターのうち、九地域のセンター長または代理（欠席は南アフリカ、フランス語圏アフリカ、ブラジル）およびPAC諮問委員会委員長が出席した。新任は、バリラ国際センター長（フランス）、サバール諮問委員会委員長（カナダ）、筆者（アジア地域センター長）の三名である。

各地域センターからの今年上半期の活動報告の後、国際センター長から、「IFLA／PAC戦略計画二〇〇六―二〇〇八」のドラフトが配布され、説明があった。これは四月に策定予定のものが、国際センター長や諮問委員会委員の交替などにより大幅に遅延しているもので、会議終了後一〇月初めに、諮問委員会の了承を得た最終版がメールで各センターに送られてきた。アジア地域センターが担当する事項として、アジアにおける地域センター間のネットワークの強化、PAC出版物の翻訳、ワークショップの企画、総合的害虫管理（IPM）の促進、国立図書館における資料防災計画策定促進などが挙げられている。また、アジア地域に大きく関係する事項としては国際センターによるタイとインドに特殊なPACセンターを設置する必要性の調査がある。東南アジア・南アジア地域に広く散在するパームリーフ資料の保存に特化したセンターの必要性については、プレコンでも話題になり、センター長会議でも認識の一致をみたが、ホスト機関の選択についてはさらに調整が必要と思われる。

PACセンター長会議を終えて

なお、二〇〇一年に決められた各センターの担当得意分野（デジタル保存―米国・オーストラリア、脱酸化および視聴覚資料・写真の保存―米国、虫害予防および新聞の保存―ベネズエラ、研修活動―ロシア、紙資料の保存―日本、防災―フランス）については、近年地域センターが増えたこともあり、国際センターの新提案を待つこととなった。

資料保存関係公開セッション

資料保存分科会・継続教育分科会・PACの共催による公開セッションは、二一日午後に「資料保存に対する理解促進と教育」をテーマに二部構成で行われた。

第一部は、全国的な資料保存活動を行っている機関から、四本の発表があった。①一九九九年に開設された韓国国立中央図書館による資料保存図書館員研修プログラムの紹介、②同じく一九九九年にニュージーランド国立図書館内に設置された全国保存推進室の、マオリの伝統文化を含む文書遺産保存のための研修・啓蒙活動、③英国の全国保存推進室および英国図書館の最近の取組み（保存関係レファレンス・サービスの拡大、蔵書の保存ニーズ調査用ツールの開発・普及、利用者教育など）、④アメリカのデジタル化研修プログラム「スキャニング学校」の過去一〇年間の変遷と成果。

人的、財政的な限界がある中で、ニーズの把握を怠らず、常に効果を検証しつつ活動している各機関の報告は、アジア地域センターの今後の活動を考える上で示唆に富むものであった。また、利用の増大に伴い資料の損傷が進む当館においても、資料の価値、利用頻度、環境、保存状態などを総合的に判断して優先順位をつけて保存対策を立てる時期に来ており、英国図書館の蔵書状態調査の事例は参考になった。

第二部は、次の九本のペーパーが提出された。①二〇〇四年一〇月の災害―ハワイ大学マノア校図書館での鉄砲水の教訓、②保存のパートナー―保存の取組みに図書館職員を関与させる、③テキストと記憶―意味の発掘、価値の伝達、④私たちの到達点―日本における資料保存の推進活動と教育、⑤文書遺産の保存における図書館・文書館・博物館の役割―ウガンダにおけるチャレンジ、⑥フランス国立図書館における資料保存研修、⑦予期せぬ事態のために計画する―図書館職員のための革新的な災害研修、⑧台湾における保存教育プログラムの実施、⑨ロシアにおける保存プログラム。

今回は、会場内各所に立っている八名（台湾は不参加）の発表者から三名を選んで順に話を聞くという方式で、筆者は、資料防災対策関係①・⑦および図書館職員啓蒙②を選んだ。資料防災計画を策定し、設備や体制を整え、職員を訓練しておくことが、いかに重要であるかを身を持って体験したハワイの話は印象的であった。④は立教大学の小泉徹氏による発表で、酸性紙問題、阪神淡路大震災などを契機とした日本の資料保存活動の進展を、当館の保存協力活動も含めて報告され、人を集めていた。

狭くもあり、深くもある資料保存の世界で、道しるべとなる人々との出会いは貴重であり、多くの専門家達と顔見知りになったことが、今大会の一番の収穫であった。

（さいとう　ゆきこ　収集部司書監・IFLA／PACアジア地域センター長）

目録・書誌情報関係会議

アジアからの声を

原井直子・横山幸雄

目録・書誌情報については、書誌調整部会、同部会を構成する各分科会、および書誌標準に関するＩＦＬＡ－ＣＤＮＬ同盟（IFLA-CDNL Alliance for Bibliographic Standards：ＩＣＡＢＳ）が、オープンセッションを開催した。さらに、大会に先立っては、国際目録規則に関する第四回ＩＦＬＡ目録専門家会議（The Fourth IFLA Meeting of Experts on an International Cataloguing Code、以下「ＩＭＥ－ＩＣＣ４」とする）が八月一六～一八日にソウルの韓国国立中央図書館において開催された。それらの概要を紹介する。

ＩＭＥ－ＩＣＣ４

ＩＭＥ－ＩＣＣ４は、アジア各国から目録専門家が結集する初めての機会となった。一二か国から四四名、そのうち一一名が日本からの参加であった。

同会議の目的は、書誌および典拠レコードの標準化の促進および世界的な目録情報の共有化である。具体的には、一九六一年に定められた標目に関する国際原則である「パリ原則」を、目録概念モデルとして提唱されているＦＲＢＲ（書誌レコードの機能要件）の観点から見直し、時代情勢にあわせて多様な図書館資料に適合するものに拡張するとともに、標目のみならず記述にも対象範囲を拡大した新たな国際目録原則を策定することを目標とし、「国際目録原則覚書」を作成中である。

第四回にあたる今回は、アジア諸国の意見を集約し反映させること、つまり、アジア各国で使用されている目録規則とパリ原則との類似点、相違点を比較、検討し、必要とあれば「国際目録原則覚書草案」を修正すること、加えて用語集についてもアジア諸言語の視点からレビューすることなどが目標であった。

全体会においては、最初に、企画委員会から国際目録原則の背景説明があった。次に、アジア七か国（日本、中国、韓国、スリランカ、インドネシア、カンボジア、ネパール）から、それぞれ自国の目録規則の歴史と現状や将来、パリ原則との類似点および相違点、実際の目録作業における運用実態などについての報告が行われた。

五つの作業部会（個人名、団体名、逐次性、統一タイトルと一般資料表示、マルチパート構造）は、それぞれのテーマごとに検討を行った。各作業部会においては、英語、中国語、日本語、韓国語の四か国語の同時通訳が用意された

ほかリーダーの司会進行を補助するための記録員が配置されたこともあって、活発な議論が繰り広げられた。

作業部会での検討結果は、リーダーが部会報告として取りまとめ、全体会において報告した。その後、部会提案・意見について参加者全員による審議が行われた。

ＩＭＥ－ＩＣＣ４からの提案はアジア各国で共有されるとともに、これまでのＩＭＥ－ＩＣＣ参加国での検討を経て、ＩＭＥ－ＩＣＣ４の草案として確定される。二〇〇七年八月に南アフリカのプレトリアにおいて開催される第五回会議でも同様の検討が行われ、最終的な「国際目録原則覚書」に結実する予定になっている。

書誌分科会常任委員会

大会前後の一九日と二五日に開催された書誌分科会常任委員会では、電子情報資源の全国書誌収録および全国書誌の電子化について、ワーキンググループの進捗状況が話題となった。現在、ガイドライン策定を目標として作業を進めているところである。また、全国書誌における主題アクセス等、分類・索引分科会や国立図書館分科会と連携すべきテーマが挙げられており、今後の協力関係が課題となっている。

ＵＮＩＭＡＲＣオープンセッション

テーマを「文字種とＵＮＩＭＡＲＣとＵＮＩＣＯＤＥ」と題して八月二一日に開かれた。五件の発表があった。

日本からも「日本語の文字種とＵＮＩＭＡＲＣ」と題してＪＡＰＡＮ／ＭＡＲＣのＵＮＩＭＡＲＣフォーマット版について報告した。日本語の特性、特に漢字形と読みの関係を説明し、その前提の下に書誌データをＵＮＩＭＡＲＣフォーマットでどのように取り扱ったかという技術的な側面を紹介した。また、国立国会図書館でＪＡＰＡＮ／ＭＡＲＣのＵＮＩＭＡＲＣフォーマット版を開発した経緯と提供の現状をあわせて報告した。

フランスからの多言語資料を取り扱う基盤としてＵＮＩＣＯＤＥを使用している実例報告もあり、セッション全体としては、ＵＮＩＣＯＤＥに関する話題が中心であった。

書誌調整部会オープンセッション

同じ二一日には書誌調整部会のセッションも開催された。このセッションでは、書誌調整分野における最近の動向についてワーキンググループなどからの進捗状況についての三件の発表と、韓国から二件の発表があった。韓国からの発表は電子情報に対応したものと書誌調整全体に関したもので、両者ともに詳細な内容であった。

ＩＣＡＢＳオープンセッション

ＩＣＡＢＳは、ＣＤＮＬ（国立図書館長会議）との協同により二〇〇三年に設立したＩＦＬＡの新しいコア活動で、

国際書誌調整と国際ＭＡＲＣ（ＵＢＣＩＭ）および国際データ流通と通信（ＵＤＴ）を継承している。これまでのセッションではＩＣＡＢＳを構成する六つの国立図書館から各館の活動報告があるのが常だったが、「目録の役割変化―資源の発見と提供を支える」と題した二二日のセッションでは、目録業務の生き残りに向けた論点整理、オーストラリア国立図書館および米国議会図書館の取組み例の紹介が行われた。

書誌分科会オープンセッション

「全国書誌―アジアの経験」をテーマとした二二日のセッションでは、韓国、中国および中央アジア・ロシア五か国の全国書誌について発表があった。韓国の報告では、電子情報資源への対応や新納本制度の紹介等、この分野における進展ぶりが紹介された。中国の報告からは、納本図書館と全国書誌作成機関の乖離、外国語資料への対応等、問題点の率直な指摘があった。

目録分科会オープンセッション

「目録業務のパートナーシップ―原則、計画、出版者」というテーマのもと二二日に行われたセッションでは、五件の発表が行われた。うち二件は、ＩＭＥ－ＩＣＣ第三回カイロ会議および第四回ソウル会議の報告およびＶＩＡＦ（バーチャル国際典拠ファイル）の米独典拠リンクプロジェクトの報告であり、残り三件はドイツ、ラトビアおよび香港からの事例紹介である。セッション自体の雰囲気からはＩＣＡＢＳでの危機感のようなものは感じられなかったが、それぞれのテーマと内容を突き合わせてみると、やはり現在の目録の機能、目的等に関して関係者の意識的な（または無意識の）葛藤のようなものが浮かび上がってくるようである。

分類・索引分科会オープンセッション

二三日には分類・索引分科会のセッションが開催された。テーマは「多言語、多文字種のネットワーク環境下、特にアジアにおける主題アクセスの互換性」であった。

まとめ

目録・書誌情報の分野ではグローバル・ツール、グローバル・ユースが重要であり、これらを欧米だけのものでなく、真に世界的なものとするためにもアジアからの声は必要である。今大会は、アジアの目録専門家が一堂に会し、協力する基礎が築かれたという側面があり、個々の発表とはまた別の大きな成果であったと言えるだろう。

（はらい　なおこ　書誌部国内図書課長）
（よこやま　ゆきお　書誌部書誌調整課課長補佐）

子ども・ヤングアダルト図書館分科会

家族をつなぐ読書――架け橋としての図書館

石渡裕子

筆者は、今回の派遣団として子ども・ヤングアダルト図書館分科会常任委員会および各種主催行事に参加する機会を得た。なお、同常任委員会委員として佐藤尚子関西館資料部収集整理課長も出席した。

常任委員会

八月一九日、二二日（臨時）、二五日の三日間、IFLA主会場であるCOEXにて開催された常任委員会は、一八名の常任委員のうち一六名が出席したほか、オブザーバーとして九名が参加し、イヴァンカ・ストリセビック委員長（クロアチア）により議事が進められた。プロジェクトについては次のような報告があった。

①「児童図書館サービスのためのガイドライン」の各国語への翻訳について

②「ヤングアダルトサービスのためのガイドライン」は改訂版の草案を来年のダーバン大会までに準備し、再来年のケベック大会で完成、印刷の予定

③「乳幼児サービスのためのガイドライン」は第二草案について他の分科会からいくつか要望が出されたが、最終稿を作成しダーバン大会前の刊行を目指す。

また、ダーバン大会のプレコンファレンスおよび視覚障害者分科会との合同セッションについての討議内容についても報告された。

公開セッション

八月二一日の公開セッションは、読書分科会と合同で開催したため、通常の二倍、約四時間を費やすことができた。「ファミリー・リーディング」をテーマに、三つの報告と四つの事例研究という構成で、三四八人が参加した。

報告一　韓国の子ども図書館サービスにおけるファミリー・リーディング（韓国）

報告二　フランス語圏発展途上国の文化政策における朗読の重要性について（フランス）

報告三　ファミリー・リーディングに関する研究――国際的観点より（英国）

事例研究は、日本、アルゼンチン、デンマーク、インドネシアにおけるファミリー・リーディングの実践例である。そのトップバッターとして高橋樹一郎氏（天理市立図書館副館長）により、

「日本における私設子ども図書館」と題して「文庫」の歴史と現状についての報告がなされた。

いずれの報告も写真や図表を多用し、世界各地で営まれているファミリー・リーディングの実情を視覚に訴えると共に、本を手にした子どもたちの生き生きとした表情を映し出し、明日への希望を抱かせるものであった。まさに本は家族をつなぎ、図書館は様々な空間・技術・人材を駆使してその架け橋となっているといえよう。

子ども図書館訪問

韓国の常任委員会委員である宋永淑氏のご尽力により、ソウル市内のいくつかの子ども図書館を訪ねることができた。瑞草区立子ども図書館、国立子ども青少年図書館、蘆原子ども図書館などである。それぞれが独立したおはなしの部屋を持つとともに、マルチメディア室が整備されていた。また、新しく設立された国立子ども青少年図書館や蘆原子ども図書館の書架や家具が円形であり、国際子ども図書館の子どものへやを彷彿とさせるものがあった。靴を脱いであがる作りが欧米などの委員には珍しいとみえ、ちゃぶ台に絵本を広げて喜ぶ様が見受けられた。

国立子ども青少年図書館では、先の公開セッションでも劇を演じてくれたグループ（宋氏が会長を務めるソウル読書教育研究会のおはなし会の皆さん）によるストーリーテリングとマダンノリ（直訳すれば「庭遊び」だが韓国の伝統演劇のひとつ。村芝居）、スクリーンを用いての絵本の読み聞かせが行われた。分科会関係者のみならず、一般の利用者も入場できたため、舞台ににじり寄っていったり、演者に驚かされて母親のもとに逃げ帰ったりする子どもたちの様子に参加者から笑い声があがっていた。ここでも図書館と家族のあり方の一面を実感できた。

国立子ども青少年図書館

学位論文館を改装して今年の六月二八日に開館したばかりのこの図書館は、韓国唯一の国立の子ども図書館である。その児童サービス部門担当から国際子ども図書館の担当者と懇談したいという申し入れがあり、八月二四日の夕刻にその時間を持つことができた。児童サービスを担当している金明禧情報サービス課長と交互に両館の概要を説明しあった後、質疑応答を行った。実務に即した懇談内容は、今後の運営に資すると思われる。

おわりに

ＩＦＬＡ大会の開会式において、韓国の図書館の状況に関する様々な数字がスクリーンに次々と映し出されてゆく。「子ども図書館の増加率　五、〇〇〇％」が表示されるや否や会場からどよめきがあがり、次いで大きな拍手が沸き起こった。韓国で、そして世界で「橋」を架ける槌音が響くことをともに喜び、応援する図書館員たちの熱い思いを感じた一瞬であった。

（いしわたり　ひろこ　国際子ども図書館児童サービス課長）

ソウル点描 2

文化の夕べの日のこと

大会三日目の夜、文化の夕べが催された。伝統楽器による演奏などがあったが、中でも素晴らしかったのは太鼓を使った民族舞踊である。色鮮やかな民族衣装を身にまとい、大小さまざまな太鼓をたたきつつ大勢の男女がぴたりと息を合わせて舞う姿は壮観だった。

不思議なもので、太鼓の響きというのは、人間の体の奥底に直接届き、心を揺さぶるような強い力を持っている。このイベントのパンフレットによれば、太鼓の音は大地の響きを表現しているという。美しいたとえだと思う。初めて目にした韓国の音楽舞踊だったが、その力強さ、華麗さに圧倒された数時間だった。

その会場へはCOEXから専用バスに乗って行ったのだが、その車中ではあるノルウェー人参加者の隣に座った。一時間以上かかっただろうか、出身地に始まり、色々な会話をすることができた。彼女はかなり日本に詳しく、ソウルへの機内で読んでいたのが村上春樹、自家用車は二代にわたって三菱、二〇歳になる息子さんも日本が好きで、若手日本人監督の撮影したものや東京が舞台の映画を観ては、日本に行きたいと言っているという。

バスを降りる際に別れたのだが、彼女もきっと文化の夕べを楽しんだことと思う。メインの伝統芸能とともに、車中での出来事も忘れられない一日となった。

（石塚陽子）

饅頭がギョーザ？

訪韓当初ソウルはとんでもない猛暑だった。夕方になっても、路を歩くと汗が滴り落ち全身汗まみれである。ソウルの盛夏は二〇年以上前に体験済みだが、その時はこんなには暑くなかったなあなどと思い出に浸りつつ、延世大学近くの学生街シンチョン（新村）を歩いていると、おあつらえ向きに「ネンミョン（冷麺）」の看板が見えた。息も絶え絶えに冷房の効いた店内に入り、ムルレンミョン（水冷麺）を注文する。例によって注文せずともキムチとカクトゥギが勢いよくテーブルに並べられ、まもなくムルレンミョンが登場。冷たくておいしい。だが、晩御飯にはちょっと物足りない。店内を観察すると、マンドゥをおいしそうに食べている人があちらこちらにいた。漢字で書くと「饅頭」であるが、日本の「お饅頭」のような甘いあんこも入ってなければ、中国の饅頭（マントー）のようなふわふわ感もない。いわば、丸い餃子のような食べ物である。蒸したチンマンドゥもあれば、水餃子ならぬムルマンドゥ（水饅頭）もある。餃子よりも大きいので結構おなかがいっぱいになった。ルーツは同じものでありながら、中国、韓国、日本でそれぞれ異なるものに進化している。まさに東アジアの文化伝播を象徴する食べ物といえないだろうか。

（石川武敏）

国立図書館分科会

国立図書館　知識社会のダイナミックなパートナー

植月　献二

国立図書館分科会は、二二日午後に二時間のセッションで開催された。筆者は発表者としてこれに参加したので、概要をかいつまんで紹介する。

今年は定員千名のオーディトリアムを会場に二百名程度の参加者を得て開催された。カナダ国立図書館のイングリッド・パレント氏の司会で進められ、ＩＦＬＡ公用語に中国語、韓国語を加えた七か国語の同時通訳があった。

この分科会の今年のテーマは、「国立図書館　知識社会のダイナミックなパートナー」であった。ちなみに、昨年のテーマは「文化遺産のネットワーク化―図書館、文書館、博物館の連携」であり、今年はこれに続いた一連の課題であった。国立図書館は、さまざまな機関と協力し、また、新しい技術を適用して国内外を問わずその蔵書を多くの人々に利用できるようにしてきたが、情報技術の発達したこの知識社会にあって、国立図書館が持つべき新しい役割、協力関係について改めて課題としたものである。

司会のあいさつに続いて四名のペーパー発表があった。

最初に、韓国中央図書館の李治周図書館サービス部長から、「図書館の競争力強化における韓国国立中央図書館の役割」と題する発表があり、同図書館の韓国におけるリーダーシップを印象付けた。次に、スコットランド国立図書館のマーティン・ウェイド館長から「新しいパートナーシップによる新しい顧客―スコットランドその他での経験から」と題する発表があり、あらゆるタイプの図書館との連携とネットワーク連携の必要性を強調した。続いてロシア国立図書館のヴィクター・フェドロフ館長からは「情報経済における国立図書館の役割　ロシア国立図書館の経験に重点を置いて」と題する発表があり、現代は、図書館、とりわけ国立図書館の役割を定義することが難しい状況であることを説明するとともに、その打開への道を示唆した。

最後に筆者が当館からの発表を行った。内容は「ダイナミックに変容する国立国会図書館　―研究者の図書館からみんなの図書館へ―」と題し、これまでの当館サービスの展開を簡潔に述べ、現代の情報技術を用いることにより利便性の高いサービス実現への可能性を強調した。内容が具体的で理解しやすかったためか質問も集中し、当館の事業に対する関心がうかがえた。

図書館を取り巻く状況が激しく変化していくなかで、国立図書館の役割の変化と可能性の広がりを認識し、類縁機関と協力することによって変革の努力を続けていくことの重要性がクローズアップされた分科会であった。

（うえつき　けんじ　総務部企画課電子情報企画室長）

政府機関図書館分科会

顧客ニーズ　政府機関図書館・情報センター変革の原動力

ローラー　ミカ

政府機関図書館分科会は社会科学図書館分科会との合同セッションとして、八月二一日午前八時半からＣＯＥＸ会議・展示センター・オーディトリアムで開催された。テーマは「顧客ニーズ　政府機関図書館・情報センター変革の原動力」であり、いかに顧客のニーズを把握し、それに基づいてサービスを向上していくか、そしてその成果をどう評価するかという視点からのペーパーが求められた。

ナンシー・ボルト分科会長が司会を務め、まず当初プログラムにあったインドからの発表が発表者の都合により中止になった旨が伝えられた。この結果、筆者を含む三名によるペーパー発表が行われた。

まず、英国ウェールズ議会図書館・出版サービス長レベッカ・デービス氏が「語らない顧客ニーズを満たす―ウェールズ議会図書館・出版サービスの二つの簡便な評価法」と題し、一九九九年設立のウェールズ議会に属する同図書館が立法補佐サービスを提供するとともに、外部からの依頼に応じ議会刊行物を送付していること、二〇〇五年から二〇〇六年にかけて内外の顧客ニーズに関連する調査を行ったことを報告した。ニーズ調査結果はサービス向上に役立てられるとともに、議会図書館職員の職業意識・満足度向上に貢献しているという。

続いて、ポルトガル情報管理協会のパウラ・オチョア氏、レオノール・ガスパール・ピント氏による「質―ある政府図書館における進行中の試みと反響（一九九六―二〇〇六）」が発表された。ポルトガル教育省官房情報担当の顧客ニーズを基盤とする組織戦略が理論的側面に重点を置いて解説されていた。

最後に筆者から、「日本の政府機関図書館ネットワーク―新しい時代の顧客に奉仕する」と題し、当館の支部図書館制度について概観した後、支部図書館に対して行ったヒアリングやアンケート調査を紹介した。さらに比較調査としての米国の連邦政府図書館における聞き取り調査等も通して、支部図書館のニーズと取り組むべき課題を提示した。そして、この課題に取り組むため今年度中期計画を策定中であることを紹介し、計画が当館の評価制度において評価されることを説明した。

政府機関図書館ネットワークとしての支部図書館制度が世界的にユニークなものであることが聴衆の興味をひいたようで、当館の発表に質問が集中した。質疑応答を通し当館と支部図書館制度の機能と役割についても理解を深めていただくことができたのではないかと思う。

（ローラー　ミカ　総務部支部図書館・協力課課長補佐）

新聞分科会

東アジアにおける新聞

堀越敬祐

二一日の新聞分科会は、朝一番に開催されたセッションにもかかわらず、三〇～四〇人の出席者があった。

最初の発表は、筆者による「国立国会図書館における新聞のマイクロ化と目録作成」である。まず当館の新聞資料の所蔵状況と利用状況を簡潔に述べた後、日本新聞教育財団との共同事業である主要新聞のマイクロ化について、事業の内容、沿革、規模、問題点等を紹介した。国立図書館と業界団体が共同で新聞のマイクロフィルムを継続的に製作する例は他国では見られず、興味深い話題の提供となった。二つめは、当館が運営する「全国新聞総合目録データベース」の紹介である。これは、全国紙に対して複数の地方版が存在し、また一紙で原紙・マイクロ・縮刷版といった複数の媒体が存在する新聞の複雑な所蔵状況を反映した、他国に例を見ないデータベースであることから、マイクロ化と同様に出席者の関心をひいていた。

二番目は、イリノイ大学（アメリカ）のL・ジャニキ・ヒンチクリフ氏による「デジタルニュース　国際化に対応した情報リテラシー教育」と題する発表であった。従来の紙媒体の新聞ではなく、インターネットを通じて提供されるニュースについての言及である。世界中の高品質のニュースがタイムリーに入手できる優れた効果と、発信源による偏向報道が存在する等の問題点を挙げ、イリノイ大学で実践するリテラシー教育について紹介していた。

三番目は、ソウル経済新聞社（韓国）のS・ジャン氏による「インターネット世代―ジャーナリストの情報収集能力の変化」と題する発表であった。氏はインターネットの特性として①双方向通信による対話性、②他の情報へ繋がるハイパーテキスト、③オープンスペース、の三点を挙げ、活字メディアの衰退とデジタルコンテンツサービスの隆盛を指摘するとともに、ジャーナリスト（ニュースの発信者）は、高い情報収集能力と分析能力を強化する必要があることを訴えていた。

四番目の発表は、H・ワルラーベンス氏（ドイツ）による発表「初期の東アジアの新聞に関する西洋の視点からの幾つかの書誌学的注意事項」であった。一九世紀から二〇世紀にかけての中国、朝鮮、日本の新聞が発刊された背景について、「研究が遅れている」と言いつつも丁寧な研究成果を報告していた。

一通り発表が終わった後に質疑応答があった。筆者の発表に対しては「全国新聞総合目録データベースはインターネット上で見られるのか」という質問があり、「当館ホームページからアクセスが可能であるが、ページは日本語しか用意していない」と回答を行った。

（ほりこし　けいゆう　主題情報部新聞課課長補佐）

地誌・地図図書館分科会

どちらの名前か？場所の地理的な命名

樋山千冬

八月二三日、この分科会では、南北アメリカ大陸の地名および日本海の呼称をテーマとした発表が行われた。

イ・ギソク　ソウル大学名誉教授・「東海協会」会長は、「東海か日本海か」と題し、次のとおり主張した。①「東海」の呼称は古代中国および朝鮮において五世紀には確立、②西洋の古地図でも「東海」「朝鮮海」とするのが通例。「坤輿万国全図」は日本海を用いた唯一の例外、③「日本海」は韓国が日本の植民地支配下にあった一九二九年の国際水路会議（ＩＨＯ）において日本の帝国主義者の企てにより採用された、④日本海は西欧世界によって確立した外来の名前であるから廃すべきだ、⑤韓国政府の努力により、二〇〇二年の国連地名標準化会議（ＵＮＣＳＧＮ）において日本が日本海という呼称を国際社会に押し付けることはできない旨の議長声明が出され、同年のＩＨＯは当該水域を空欄にした「大洋と海の境界」の改訂版を作成した、⑥世界の主要な地図、地球儀、ニュース番組において日本海の名称を使用しない、または「東海」と併記する例が増えてきている。

またイ氏は、「東海協会」が韓国政府の全面的支援を受けており自分は政府代表団の一員として活動していると述べ、韓国政府と共同制作した資料や地図を会場で配布した。

これに対し当方から、次のとおり質問および反論を行った。①イ氏が「東海」の用例として挙げた史料は中国から見て東にある渤海を指して東海と称している。また朝鮮の古地図にある「東海」が朝鮮半島の沿岸部を指すという事実はイ氏自身認めているのに「東海」が当該海域の呼称だとの主張に朝鮮古地図を援用するのはなぜか、②西洋の古地図で東洋の海という呼称を用いている例を「東海」だと解するのはなぜか、③イ氏は世界の主要な図書館における西洋の古地図の調査数を七六三とするが、一六世紀から一九世紀に作成された当該海域を含む地図は外務省の調査では米国連邦議会図書館で所蔵するものだけで一、四三五あり、これらの地図の大半は当該海域を日本海と記述している。日本による韓国支配とは無関係、④ＵＮＣＳＧＮの議長声明は日本を名指ししたものではない。ＩＨＯの「大洋と海の境界」の改訂は現在保留中、⑤日本海の呼称をめぐる問題は一九九二年に韓国政府が日本海を「東海」と呼ぶことを主張して以来二国間の政治的紛争に発展しているが、ＩＦＬＡは政治問題を扱う場ではないのに韓国政府の一方的主張を流布する場となったことを深く憂慮する。

イ氏は、東にある海を東海と呼ぶのが自然、日本国外務省の調査は一八五〇年から一九〇〇年までの範囲を含めていると答えた。他に質疑応答はなかった。

（ひやま　ちふゆ　総務部総務課課長補佐）

ＩＦＬＡ展示会

ＩＦＬＡ大会では例年、同時に展示会を開催し、世界各国から多くの図書館、出版社、関係業者が出展している。今回は大会期間中の八月二〇日から二三日まで、大会と同じ会場（ＣＯＥＸ）で開催された。隣国韓国での開催ということで、当館は初めて展示会に出展した。世界各国からの来場者に当館の全体像を紹介し特色をアピールするため、次のような展示を行った。

当館概要（正面）

・当館紹介ＤＶＤ（英語版および韓国語版）上映

・パネル展示（おもな業務、三施設の所在地とその役割）（上掲）

資料保存活動（左側）

・伝統的な修復技術用具、中性紙使用チェックペンとチェックサンプル

・段階的保存の取組み（保存箱、ポリエステルフィルム等）、和紙サンプル

・パネル展示（虫損補修、中性紙使用率調査、段階的保存の実際）（上掲）

当館ブース全景（１区画３ｍ四方）

配布用パンフレット

英語版千二百、韓国語版七百、その他中国語版、日本語版を含め合計二千部を用意。当館紹介等合計七種類をクリアフォルダに入れたセットを来場者に配布。

電子図書館サービス（右側）

・電子図書館サービスのデモンストレーション（実際にＰＣを使用）

・パネル展示（近代デジタルライブラリー紹介）（上掲）

来場者の反応

企業等の中には複数の区画を使い大規模に出展している団体も多かった。また韓国国立中央図書館や韓国国会図書館は、開催国ということで豪華な装飾のブースを設営していた。

そのような中、当館の展示内容は派手ではないが実のあるもので、熱心に見ている来場者も少なくなかった。担当職員は通路を通る人に積極的に話しかけてパンフレットを配布し、広報に努めた。

特に資料保存については、和紙の入手法等の具体的な質問を多数受けた。電子図書館サービスでは電子化対象資料の範囲や数量についての質問が多く、新しい資料の電子化への要望も高いようだった。電子図書館も含めた遠隔サービスに対し質問をする人もあり、利用方法の具体的な説明に際してインターネット接続のＰＣが活躍した。

また国際子ども図書館への関心も高く、展示した十数枚のポスターも好評で、終了時には他国の出展者から譲ってほしいと頼まれ、すべてお渡しした。

配布資料については、古典籍資料の絵柄（「十二月遊び」より祇園祭の図）を使用したフォルダが美しいと好評だった。しかし7種類のセットは重いと敬遠する人もあり、あれこれ紹介しようと欲張りすぎたことは反省点となった。

展示会概観

出展者数は八九で、いずれも一〇〇以上だった前回前々回と比較すると数は少ないが、なかなか盛況であった。展示会初日の夕方はオープニングパーティが開催された。通路という通路にテーブルが並べられ、料理やグラスが所狭しと置かれる様子は壮観であった。参加者は狭くなった通路で押し合いへし合いしながら食事や会話を楽しんでいた。

会場内には無料のインターネットカフェがあり利用されていた。また軽食や土産物の販売もあり、ＩＦＬＡオリジナルグッズだけでなく韓国の一般的な物産も並んでいた。会場内でお土産の調達まで済ませられる、忙しい参加者にはありがたいサービスだった。

また二二、二三日は展示会場の壁面でポスターセッションも行われた。参加者が思い思いの趣向を凝らしたポスターを掲示して発表を行い、多くの人でにぎわっていた。

今回は広く当館の活動を広報することができ、また世界の図書館人から当館に寄せる期待も感じられた、有意義な出展であった。

（総務部総務課、総務部支部図書館・協力課）

"This is National Diet Library" と言いつつパンフレット入りの当館特製クリアフォルダ（「十二月遊び」から、祇園祭の図）を道行く人に手渡す…ここから会話が始まりました。

ＩＦＬＡソウル大会はお隣の国での開催ということもあり、初めて当館から展示会に参加。日本図書館協会（ＪＬＡ）・国立情報学研究所（ＮＩＩ）・当館・科学技術振興機構（ＪＳＴ）と日本の四団体がブースを並べ、さながら日本通りの様相。特にＪＬＡでは紙芝居の読み聞かせを行っており、にぎやかな一角でした。

初めての海外でのブース設営で、設営準備当日の担当者の苦労もひとしお。海外への出展は初めてということもあり、パネルや展示品の設置を一から自分達で行いました。リースしたものがなかなか到着しない、違ったものがくる…その都度携帯電話で連絡です。

用意したパンフレット類は全部で七種、二千部ずつ持って来ました。日本から届いた荷物を眺めると、通路をふさぐほどの量です。本当に全部配りきれるのかなあ…と一抹の不安を覚えながらクリアファイルにセットをしていきました。

それらを数部ずつ持ちながら、冒頭のごあいさつ。若い女性からは、まず "Diet?" と興味津々の反応が返ってくるのですが、"Diet" とは、議会（Parliament, Assembly）のことです。」との説明で「あー、なるほど。国立でダイエットの図書館があるなんてすごい、と思ったけど、Diet にはそういう意味もあるんですか。」と納得していただきました。

資料を受け取っただけで立ち去る人もいれば、クリアフォルダの図柄に興味をもっていろいろ質問してくる方も…図柄に興味を持った方には、インターネットで提供している貴重書展を紹介します。あるいは当館のことをすでにご存知の方からは、ピンポイントでサービスについての質問がきます。説明用に設置したパソコンで当館サイトにアクセスしながら、説明をしていきました。遠隔サービスについての質問は本当に多かったです。積極的にパンフレットを配布して、ほとんど全部を配ることができました。

海外に出て外からＮＤＬを眺める、貴重な経験でした。

（お手伝い二号）

特別展示のお知らせ

旧帝国図書館建築一〇〇周年記念展示会

平成一八年一二月二一日（木）から
一九年　二月二〇日（火）まで
於　本館二階第一閲覧室前（東京本館）

国際子ども図書館の建物は、今から一〇〇年前、明治三九（一九〇六）年に帝国図書館として建築されたものです。

国立国会図書館では、建築一〇〇周年を記念し、記念行事を行っており、一二月二一日からは、東京本館で標記展示会を開催します。

展示会では、国立国会図書館が所蔵する資料を展示することで、帝国図書館から国立国会図書館支部上野図書館、国立国会図書館国際子ども図書館に至る歴史を紹介します。また、パネルなどによって各閲覧室の新旧対比、建物の技術的な側面等もあわせて紹介します。

※この展示会は平成一八年九月二六日から一二月一七日まで国際子ども図書館で開催した展示会から一部を除いて再構成したものです。

※旧帝国図書館建築一〇〇周年記念サイト
http://www.kodomo.go.jp/100th/index.html

平成一八年度国立国会図書館長と大学図書館長との懇談会について

平成一八年一一月七日、国立国会図書館（東京本館）において、国公私立大学図書館協力委員会委員館および関係機関・団体の代表者を招請し、標記懇談会を実施した。

当館と大学図書館との間では、平成一七年度の同懇談会において実務的協議の場を設けることが合意され、本年二月、当館および大学図書館間の共通する課題について政策的および実務的な面から問題を協議し、両者間の連携協力を推進することを目的として、「国立国会図書館と大学図書館との連絡会」が設置され、活動を開始した。（連絡会設置の詳細については本誌五四一（本年四月）号で報告）。この連絡会の活動を通じて、当館と大学図書館との間の理解が今までになく深まった中での懇談会の開催となった。

懇談会では、黒澤隆雄国立国会図書館長および野々山隆幸国公私立大学図書館協力委員会委員長（横浜市立大学学術情報センター長）（**写真**）からのあいさつの後、当館から四題、大学図書館および関係機関から二題の報告を行った。

当館からは初めに戸澤総務部司書監が「『国立国会図書館と大学図書館との連絡会』活動報告」と題して、本年二月からの連絡会の活動について報告を行い、併せてＮＤＬ－ＩＬＬ運用中止に係る大学図書館からの要望についての当館の検討状況について説明した（**後掲＜参考＞参照**）。次に和中資料提供部長が「利用サービス改善の取組」と題して、複写に係るサービス改善について報告した。続いて武藤関西館事業部電子図書館課長が「国立国会図書館デジタルアーカイブ事業の展開」と題して、当館の電子図書館事業の概要と平成二一年度運用開始予定のデジタルアーカイブシステムについて報告した。中井書誌部書誌調整課長は、「国立国会図書館の書誌作成・提供およびメタデータをめぐる検討状況について」と題して、当館の書誌データ作成と提供の達成点と課題について説明した後、当館のメタデータ基準の検討状況を報告した。

大学図書館側からは、土屋俊千葉大学附属図書館長から「最近の大学図書館間における相互貸借・文献複写の現状について」と題して、平成六－一七年度のＮＡＣＳＩＳ－ＩＬＬを介した大学図書館間のＩＬＬデータを分析した結果について報告があった。次に安達淳国立情報学研究所開発・事業部長から『次世代学術コンテンツ基盤共同構築事業』と大学図書館の機関リポジトリ構築の現状」と題して、国

立情報学研究所（以下ＮＩＩ）が推進している次世代学術コンテンツ基盤共同構築事業の委託事業として平成一八－一九年に全国五七大学を選定し、機関リポジトリの展開と先端的な研究開発を推進していることが報告された。

続く懇談では、当館のインターネット情報の収集・利用に関する制度化の取組みの現状、大学図書館が作成・収集した電子コンテンツの保存・提供における当館との連携、当館の大正期資料の電子化作業における著作権処理等の問題点、グーグル時代の書誌作成のあり方、書誌作成と電子テキストの同時収集の問題等について質疑や問題提起が行われた。また、大学側からアジア言語資料をＮＤＬ－ＯＰＡＣで検索できるようにすることと雑誌記事索引に電子的資料を採録することの可能性について意見・要望が出された。最後に生原副館長があいさつし、懇談会を終了した。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

＜参考＞　「国立国会図書館と大学図書館との連絡会」の活動について

連絡会は、本年二月に第一回、七月に第二回、一〇月に第三回を開催し、当館および大学図書館が共通して直面する課題について活発な協議を重ねてきた。特に、当館から主として大学図書館に対する図書館間貸出し・複写サービスの手段として平成八年度から利用されているＮＤＬ－ＩＬＬの今後について、ワーキンググループを設置し、詳細な検討を行ってきた。ＮＤＬ－ＩＬＬはＮＩＩの運営するＮＡＣＳＩＳ－ＩＬＬシステムの参加機関から当館所蔵資料の貸出しおよび複写を依頼する機能を提供するシステムであるが、当館が平成一四年からＮＤＬ－ＯＰＡＣを通じての貸出し・複写サービスの提供を開始したことにより、作業の流れの二重化や処理日数の違い等、問題点が指摘されていた。ワーキンググループは全国の大学図書館の中から特にＮＤＬ－ＩＬＬの利用の多い図書館にヒアリングを行うなどしてＩＬＬの現場の実情を把握するとともに、全体の利用状況についても分析を行い、「文献提供サービスに係る国立国会図書館と大学図書館の今後の連携のあり方について」と題する報告書をまとめ、第二回連絡会に報告した。

報告書の骨子は以下の二点に要約される。（一）大学図書館は平成一九年四月から、国立国会図書館に対する文献提供依頼をＮＤＬ－ＯＰＡＣ利用に一元化する。国立国会図書館は大学図書館からのＮＤＬ－ＯＰＡＣの仕様等に関する改善要望を受けて、その改善に努力する。（二）国立国会図書館は、大学図書館の運営における厳しい状況を理解し依頼業務の負荷を軽減するため、ＮＩＩの料金相殺サービスに加入することを含め、利便性の向上を図る方策を検討する。

この骨子は、連絡会で了承された後、国公私立大学図書館協力委員会においても了承され、その後ＮＩＩとの協議を経て、平成一九年三月末をもってＮＤＬ－ＩＬＬの運用を中止することが正式に決定された。

（総務部支部図書館・協力課）

本屋にない本

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。このコーナーでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介します。

よこはまの浦島太郎　開館一〇周年記念特別展

横浜市歴史博物館編　横浜市歴史博物館（〒224-0003 横浜市都筑区中川中央一―一八―一）二〇〇五・一〇　一六七頁　A4　（GC76-H34）

浦島太郎といえば、誰でも知っている昔話だろう。亀を助けた浦島太郎が、亀に乗って竜宮城へ連れられて行き、乙姫の歓待を受ける。故郷に戻り、渡された玉手箱を開けると、箱から立ち上った煙で浦島太郎は老人になってしまう。そんなお話を思い出すのではないだろうか。

浦島太郎の伝承は、古くは『日本書紀』『万葉集』『丹後国風土記』などにさかのぼり、発祥地は京都府の丹後半島であるといわれている。しかし、この伝承は丹後国にとどまらず、各地へ伝播し、浦島寺と呼ばれる寺や浦島伝説として全国で伝えられている。そのような伝説の残る地のなかでも著名なのが、木曽の寝覚めの床や、横浜市神奈川区にあった浦島寺（観福寺・観福寿寺）である。

本書は、横浜市歴史博物館で行われた開館一〇周年記念特別展「よこはまの浦島太郎」の図録である。横浜の浦島寺にまつわる歴史と、上代に始まり現代に至る浦島太郎の物語の歴史を、二〇〇点を超えるカラー図版とともに紹介している。

横浜に伝わる浦島太郎の伝説はどのようなものだろうか。浦島寺略縁起によれば、三浦半島の浦島太夫が丹後国に移り住み、その子である太郎が竜宮に行って、観音像と玉手箱を得る。丹後に戻った太郎は、両親知人のいないことを嘆き、故郷の三浦半島へ向かう。そして両親の墓のあった神奈川に庵を建て、観音像を納めたのが浦島寺の始まりであるという。本書では、数種類存在する略縁起の記述を比較してこの伝説を解説するとともに、絵図や名所図会によって、江戸時代の浦島寺のにぎわいを描き出している。実際に展示された浦島観音像（横浜市神奈川区慶運寺蔵）の写真も収録されている。これは亀の上に観音像が乗った珍しいもので、通常は一二年に一度の開帳の際にしか見ることのできないものだという。

本書は、そのような「よこはまの浦島太郎」を描き出す一方で、文学や芸能を通じて全国に広がった浦島太郎の物語を、絵巻や写本、版本などの図版を交えながら解説している。室町時代のお伽草子から奈良絵本、江戸時代の草双紙、そして明治時代のちりめん本や国定教科書といった資料に描かれた浦島太郎の姿は、見ているだけでも楽しい。また、上代の物語にはみられなかった竜宮城や玉手箱などの表現が、社会の変化とともに形成されていった背景も、視覚的に捉えることができる。浦島太郎が亀に乗るイメージの成立は、意外にも一八世紀初めと新しいものなのだ。

本書は単なる展示図録にとどまらず、浦島太郎の伝説を知る概説書、読み物としても、十分に楽しめる書といえる。本書とともに、全国各地の浦島伝説を比較してみるのもよいのではないだろうか。

（澤井（さわい）　優子（ゆうこ））

里内勝治郎と里内文庫

栗東歴史民俗博物館　編・刊　〒520-3016 滋賀県栗東市小野二二三―八　二〇〇五・一〇
一一一頁　A4　（UL444-H3）

「本に生き、本に死ぬるわが世かな、文庫のことは夢のまた夢」――里内勝治郎の辞世の歌である。勝治郎の生涯にとって、自らが設立した里内文庫がどれほど大きな比重を占めていたのかがうかがえる。

本書は、明治四一年（一九〇八）に勝治郎が設立した、里内文庫という私立図書館の歩みをたどるものである。栗東歴史民俗博物館で、折に触れて開催された展示の集大成としての意味をもつ図録であり、勝治郎の人となりを浮かび上がらせる内容となっている。

勝治郎は、里内呉服店という商家に生まれた人物である。しかし、幼少の頃から勉学に励み、愛書家で、大量の蔵書を所有していたことが、勝治郎と図書館とを結びつける機縁となったと思われる。

明治期には図書館設立ブームがあった。その背景には、二つの機運があることを指摘できる。一つは、政府の富国強兵策を源とする、通俗教育の拠点としての図書館を作ろうとする機運である。もう一つは、内務省を中心とした地方改良運動の一環として発生してきた、地方における国民教化の拠点としての図書館を作ろうとする機運である。勝治郎が図書館設立を志したのも、こうした時流に乗ってのことであった。

里内文庫と戦後の公共図書館には、意外にも多くの共通点がある。例えば、図録の九ページにある「図書館設置ノ栞」では、巡回文庫の実施を勧めている。巡回文庫というと、今でも公共図書館の利用者にとっては、なじみの深いものであろう。しかし、勝治郎が、図書館設立の手始めに着手したのが、巡回文庫なのである。つまり、通俗教育運動と地方改良運動という、明治時代末期の社会状況の下で、巡回文庫はすでに存在していたということである。

「図書館設置ノ栞」では、図書館を小学校内に設置することも勧めている。実際、勝治郎も小学校内に里内児童文庫を開設し、児童を庫友としている。翻って現在の日本の状況をみると、学社連携や学社融合といった考えがさかんに提唱されている。時代背景は異なるものの、似たような現象が起こっているのである。

里内文庫の特色あるコレクションが勝治郎の人となりを浮かび上がらせる一例として、膨大な郷土資料を挙げることができる。勝治郎は、郷土史研究の分野でも、雑誌に多くの論考を発表するなど、業績を残している。郷土史→地方史→地域史と名称が変わり、内容が変わっても、勝治郎が郷土史を研究し、郷土資料を里内文庫に残したことの価値は、変わらない。

勝治郎はまた、独学の人でもあった。講習会や通信教育を通して、さまざまな学問を身に付けている。里内文庫の付帯事業として講習会部を立ち上げたことには、この経験が生かされているのであろう。

ここまで紹介してきたように、公共図書館との共通性はあるものの、里内文庫のあり方には、全体的に国家主義的色彩が強かったこともたしかである。国粋主義・愛国思想を鼓舞する蔵書を多くもっていたことに、それは現れている。そして、そのことが致命傷となり、戦後、里内文庫は閉鎖を余儀なくされる。残された資料は、最終的に栗東歴史民俗博物館へ収蔵され、今日に至っている。

（吉川　博史）

第二回レファレンス協同データベース・システム研修会の開催

平成一八年一〇月一二日(木)に関西館、同一九日(木)に東京本館において、標記研修会を開催した。参加者は、関西館会場一八名、東京本館会場二五名であった。

この研修会は、レファレンス協同データベース事業参加館のデータ登録およびデータベースの活用促進を目的とするものである。

各日の午前の部では、事業の概要およびデータベース・システムの機能と活用について、当館から説明を行った。午後の部では、「データ作成の意義と実践」と題して、青山学院大学文学部教授、小田光宏氏が講義を行った。講義中、参加者が事前課題として作成したデータについて、品質をより高めるためのアドバイスを小田氏が個別に行い、好評であった。その後「レファレンス協同データベースの活用によるレファレンスサービスの改善について」というテーマでグループ討議を行い、活発な議論が行われた。

※この研修会の記録はレファレンス協同データベース事業ホームページに掲載予定。(http://crd.ndl.go.jp/jp/library/)

第一〇回資料保存研修「あなたにもできる図書館資料の保護と補修」の開催

国内の各種図書館等の職員を対象に、平成一八年一〇月一二日および一三日に当館関西館第三研修室において標記研修を開催し、各日一七名、計三四名の参加を得た。前回と同様、資料保存に関する基礎的な技術の習得を目的として、ページ破れ等の簡単な補修、パンフレット製本、参加者が持参した図書(表紙と本体が分離しているもの)の補修の実習を行った。

両日とも実習の前に講義を行って「治す前に防ぐ」という予防的保存の重要性を強調し、実習後希望者には関西館施設の見学を実施した。質疑応答では、各館での資料保存の現状や課題、破損資料への対処法等、活発に意見が交わされた。研修後のアンケートでは、参加者の七五%からこの研修が今後の業務に「大いに役立つ」という評価を得た。

国立国会図書館の編集・刊行物

レファレンス　六七〇号　A4　一七〇頁

■カジノ導入をめぐる最近の動きと論議
■二〇〇六年のロシア経済の動向
■ドイツの外国人問題
■主な国会改革提言とその論点
■電源開発促進対策特別会計を巡る改革のあり方
■GATT/WTO体制の概要とWTOドーハ・ラウンド農業交渉
■WTOドーハ・ラウンドにおけるサービス貿易自由化交渉

月刊　税・送料込み　八三二円(有)

カレントアウェアネス　二九〇号　A4　三〇頁

〈小特集　IFLAソウル大会に参加して〉
■レファレンス・サービスをめぐって
■視聴覚・マルチメディア分科会を中心に
■障害者サービスの潮流
〈小特集　インターネットに対応する納本制度改正の動き〉
■ニュージーランドにおける法定納本制度改正の動き
■ドイツにおけるオンライン出版物の法定納本制度

平成一八年度児童文学連続講座―国際子ども図書館所蔵資料を使って―」の終了について

一〇月一六日から一八日までの三日間、国際子ども図書館において、当館が広く収集してきた内外の児童書および関連書を活用した標記講座を開催した。この講座は、全国の各種図書館等で児童サービスに従事する図書館員の資質向上と幅広い知識のかん養に資することを目的としている。第三回目の開催となる本年は、全国一九都道府県の公共・学校・専門図書館等から六四名が参加した。

今年度は総合テーマを「絵本の愉しみ―イギリス絵本の伝統に学ぶ―」とし、国立国会図書館客員調査員で立教大学名誉教授の吉田新一氏を監修者に、イギリス絵本に造詣の深い研究者と当館職員が講義を行った。また、講義に加え、講義で紹介された当館所蔵資料を受講者が手に取って閲覧できる時間を設けるとともに、受講者による意見交換等も行った。

平成一八年度アジア情報研修の開催

一〇月一七日から一八日まで関西館で、アジア関連情報を扱う図書館員を対象に、標記研修を開催し、一二機関一四名の参加を得た。

今回で五回目を迎えるこの研修は、平成一四年度から始まったもので、国内の図書館におけるアジア情報サービスの向上に資することを目的に行っている。

一日目は「アラブ諸国の書店、図書館、文書館―エジプトを中心に」（東京大学大学院人文社会系研究科助教授・大稔哲也氏）、「イスラーム諸国関連情報検索入門」（アジア情報課・小笠原綾、邊見由起子、大西啓子）、二日目は「トルコにおける歴史研究と出版事情」（東京外国語大学外国語学部教授・林佳世子氏）、「南アジアの言語資源を巡る諸問題―パキスタンの状況を中心に」（大阪外国語大学外国語学部講師・萬宮健策氏）の報告が行われた。

研修概要は『アジア情報室通報』第四巻第四号（二〇〇六・一二）に掲載する予定である。なお、同誌はアジア情報室ホームページ（http://www.ndl.go.jp/jp/service/kansai/asia/）に掲載している。

■フランス法定納本制度改正とウェブアーカイブへの対応
■ベトナムの図書館の概要
■ナレッジ・ベース社会に向けたタイの図書館の立場
■研究図書館目録の危機と将来像　3機関の報告書から
■米国の図書館界とSNS検閲
■米国の公共図書館における成人リテラシー支援プログラムの現状と課題
〈動向レビュー〉
■英国JISCによる教育・学習支援
〈研究文献レビュー〉
■公共図書館職員の養成教育と継続教育

季刊　四二〇円（日）

参考書誌研究　第六五号　A5　二二一頁

■京都商人高畠勘兵衛による対外情報の入手と考察―『青菰雑誌』の天保改革期記事から見た―
■幕末・明治初期雑誌目次集覧
■国立国会図書館所蔵横山由清旧蔵書について
■「国立国会図書館所蔵小杉文庫目録」補遺
■（電子展示会余録）「史料にみる日本の近代―開国から講和まで一〇〇年の軌跡―」
■（探訪記）東北大学理学部自然史標本館の

ニューヨーク・パブリック・ライブラリー主催「Ehon（絵本）」展シンポジウムに参加

一〇月二五日、米国のニューヨーク・パブリック・ライブラリーにおいて、展示会関連のシンポジウムが開催され、当館からゲストスピーカーとして間島由美子主題情報部古典籍課主査が参加した。

この展示会（名称「Ehon : The Artist and the Book in Japan」）では、同館が所蔵するスペンサーコレクションの中から八世紀から現代までの二〇〇点を超える日本の絵入り本を一挙に公開している。しかし展示会の中核は江戸時代の絵入り版本で、絵はもちろんのこと、文章、文字、印刷、料紙、装丁などが優れ、作者、絵師、書家、彫り師、摺り師等による総合芸術作品となっている本、例えば、嵯峨本謡本『通盛』、歌麿『潮干のつと』などに焦点が当てられている。展示会ではこのような本を指して〝ehon〟と総称している。

「The Japanese illustrated book : Continuity and change」と題されたシンポジウムは、展示会の客員キュレーターであるロジャー・キーズ（Roger S. Keyes）氏が中心となり、日本の絵入り本が世界で最も美しい芸術のひとつであること、ユニークで美しく、面白い本であることが話された。当館からは「Ehon : An overview」と題して、百万塔から絵入り古活字版、師宣の絵本を経て、春信、歌麿の彩色摺絵本や、若冲等の拓版画に至るまでのわが国の絵入り本の歴史を、当館の貴重書画像データベース（http://rarebook.ndl.go.jp/）から作品を引用しつつ紹介した。

なお、この展示会の図録 Roger S. Keyes : *Ehon : The artist and the book in Japan*, The New York Public Library, 2006 が、刊行されている。展示会は一〇月二〇日から来年二月四日まで開催。詳細や出品作品などについては、ニューヨーク・パブリック・ライブラリーのホームページを参照されたい。（http://www.nypl.org/research/calendar/exhib/hssl/hsslexhibdesc.cfm?id=430）

外邦図　半年刊　三、六七五円（日）

公開シンポジウム記録「デジタル時代における図書館の変革―課題と展望―」

A4　一一七頁

■情報社会とUNESCOの戦略
アブデルアジズ・アビド（UNESCO情報社会部プログラムスペシャリスト）

■デジタル情報の潮流と図書館の在り方
松村　多美子（図書館情報大学名誉教授）

■新しい情報環境における英国図書館の挑戦
リン・ブリンドリー（英国図書館長）

■デジタルアーカイブ構築に向けた国立国会図書館の取り組み
植月　献二（国立国会図書館総務部企画課電子情報企画室長）

■パネルディスカッション「情報の流通とアクセス―これからの図書館をめぐって―」
岡本　真（Academic Resource Guide編集長）、高野　明彦（国立情報学研究所ソフトウェア研究系教授）、常世田　良（日本図書館協会理事・事務局次長）、長塚　隆（鶴見大学文学部教授）、山崎　久道（中央大学文学部教授）、植月　献二（国立国会図書館総務部企画課電子情報企画室長）　司会　田屋　裕之（国立国会図書館総務部企画課長）

「関西館見学デー」の実施

平成一八年一一月一九日、当館関西館では館に対する近隣の理解を深めるため、「関西館見学デー」を実施した。これは、関西館が立地する精華町が中心となって開催される「せいか祭り二〇〇六」に合わせて行うもので、今年度で三回目となる。ふだんは休館日である日曜日に、年齢制限を廃して広く一般に自由に見学していただく機会として設けたもので、閲覧室に案内員を配置しガイドツアーを実施したほか、電子図書館サービスおよび国際子ども図書館絵本ギャラリーのデモンストレーション、関西館業務紹介ビデオの上映も行った。日頃は入館できない子どもたちの姿も見られ、悪天候にもかかわらず、来場者総数は一、四〇〇人近くに上った。

第八回図書館総合展

平成一八年一一月二〇日から二二日まで、パシフィコ横浜展示ホールで第八回図書館総合展が開催された。当館は、展示に参加したほか、「国立国会図書館の新しいサービス像」と題したフォーラム（講演会）、「国立国会図書館ホームページから利用できるレファレンス・ツール」のプレゼンテーションを行った。フォーラムの詳細は本誌平成一九年二月号で紹介する予定である。

平成一八年一月に開催した公開シンポジウム「デジタル時代における図書館の変革―課題と展望―」の記録を刊行いたしました。

このシンポジウムでは、国の内外を問わず、情報流通の場で活躍している方々をお招きし、さまざまな立場からデジタル社会における図書館の課題についてお話しいただきました。

この記録が、図書館や情報流通の今後についてさらに理解を深め、課題と対応策について考える機会を提供できれば幸いです。

一、四七〇円（日）

（ISBN　4-87582-640-0）

入手のお問い合わせ

(有)有隣堂印刷㈱（〒140-0004東京都品川区南品川六―二―一〇）

(日)日本図書館協会（〒104-0033東京都中央区新川一―一―一四）

特に記載のないものは**税込価格**です。

平成一八年度科学技術資料研修
―専門資料群とテーマ別情報源―の終了

平成一八年一一月二一日から二二日まで、当館（関西館）において、標記研修を実施した。参加者は、公共図書館八名、大学図書館一五名、専門図書館一名、計二四機関二四名だった。

二日間の研修では、はじめに、主題情報部科学技術・経済課職員が、科学技術分野のレファレンスの特徴および科学技術専門資料の概要と基本的な所蔵機関調査の進め方について紹介した。次に、関西館資料部文献提供課職員が、当館所蔵の専門資料群ごとに、概要と所蔵機関調査の方法・ツールの使い方を、演習を交えながら説明した。続いて、今年度新たな科目として、科学技術・経済課職員が、主題情報の調べ方を食品などの身近なテーマから説明した。最後に、全体質疑とまとめを行った。

終了時のアンケートでは、概論から各論へと進み、流れがよかった、講義の後に演習を行うことで理解が深まった、身近なテーマが取り上げられていて興味深かった、といった意見があった。ほかに、演習の時間が足りなかったという声もあったが、研修全体としては高い評価を得た。

お知らせ

年末年始のサービス休止について
―各施設の休館期間―

左記の期間、来館による閲覧・複写サービスを休止させていただきます。

東京本館
関西館
平成一八年一二月二八日（木）～
平成一九年　一月　五日（金）
一月五日（金）は臨時休館

国際子ども図書館
平成一八年一二月二八日（木）～
平成一九年　一月　四日（木）

―NDL―OPACのインターネットサービスの休止期間―

左記の期間、当館ホームページを通じたインターネット経由の資料検索、複写申込み等のサービスを休止させていただきます。

申込みサービス休止
平成一八年一二月二八日（木）～
平成一九年　一月　三日（水）
この期間は検索のみがご利用になれます。

サービス全面休止
平成一九年　一月　四日（木）～
平成一九年　一月　六日（土）

国際子ども図書館展示会

「大空を見上げたら－太陽、月、星の本」の開催について

昼、空を見上げるとそこにあるのは、輝く太陽。夜、空を見上げるとそこにあるのはほのかに浮かぶ月ときらめく星々。

太古から人間は、空を見上げては太陽、月、星々に祈りをささげ、詩や物語を作り、やがては、知識を蓄え、自ら月にまで到達するようになりました。

今回の展示会「大空を見上げたら－太陽、月、星の本」は、目を自然界に向け、古代から現代まで人間に身近な存在であった空に見える天体の中から太陽、月、星を取り上げます。

太陽、月、星にまつわる伝承、文学から最新科学に至るまで、国際子ども図書館が所蔵する資料を中心に、多角的な視点で各種の資料約300点を紹介いたします。世界的に分布する神話や昔話、内外の読み継がれている文学作品、SF 作品等はもとより、太陽、月、星、そして宇宙に関する科学知識を子どもたちに分かりやすく伝える科学読物、図鑑、学年誌に加え、原書なども展示しますので、様々な資料が皆さんの目にとまることと思います。

また、子どもたちを本との出会いに誘うために、活字資料だけでなく、絵本の原画、太陽・月の写真等の映像資料や宇宙服の展示も行います。

なお、会期中には、講演会、音楽会など関連催物を実施します。最初の催しとして、平成19年２月17日（土）午後２時から福江純大阪教育大学教授による講演会「神話から最新宇宙学まで」を予定しています。

催物の詳細は本誌、国際子ども図書館ホームページ（http://www.kodomo.go.jp/）等で順次お知らせします。

開催期間	平成19年２月10日（土）～ ９月９日（日）
休 館 日	月曜日、こどもの日を除く国民の祝日・休日、資料整理休館日（第三水曜日）
開催時間	9：30 ～ 17：00
会　　場	国際子ども図書館３階 本のミュージアム
入　　場	無　料

お知らせ

国際子ども図書館　学校図書館セット貸出し「世界を知るセット」（小学校高学年向）の貸出開始について

国際子ども図書館では、世界各国・地域の歴史や文化、生活等を紹介する資料、その国や地域で読まれている児童書等50冊前後をセットにして学校図書館に１か月間貸し出すサービスを行っています。

現在貸出中の、「韓国セット」、「北欧セット」、「カナダ・アメリカセット」、「アジアセット（中国・東南アジア諸国）」（各セットとも小学校高学年向／中学校向あり）、「世界を知るセット」（小学校低学年向）に加え、平成19年１月から「世界を知るセット」（小学校高学年向）の貸出しを開始いたします。なお、このセットの貸出開始に伴い、既存の「世界を知るセット」（小学校低学年向）を、絵本および昔話中心の構成に変更いたしました。

サービスの詳細および資料の解題は、国際子ども図書館ホームページ（http://www.kodomo.go.jp/）をご覧ください。

お問い合わせ先　国立国会図書館国際子ども図書館児童サービス課企画推進係
TEL：03－3827－2053（代表）　FAX：03－3827－2043

お知らせ

NACSIS-ILL 経由・総合目録ネットワーク経由の複写・貸出しの申込中止について

現在、大学図書館、公共図書館等の当館資料の複写・貸出しサービスの利用は、NDL-OPAC（国立国会図書館蔵書検索・申込システム）のほか、NACSIS-ILL 経由、総合目録ネットワーク経由でお申し込みいただいています。これらのお申込みは、当館の NDL-ILL システムで受付等を行っていますが、平成19年３月31日をもって、NDL-ILL システムの運用を中止し、平成19年４月からは NDL-OPAC でお申し込みいただくこととなりました。

なお、最終受付日は以下のとおりです。

NACSIS-ILL 経由の複写および貸出しのお申込み ―― 平成19年３月31日
総合目録ネットワーク経由の貸出しのお申込み ――― 平成19年３月30日

詳しくは、当館ホームページ「NACSIS-ILL 経由・総合目録ネットワーク経由の複写・貸出しの申込中止について」（http://www.ndl.go.jp/jp/library/library_ndlillnews.html）をご覧下さい。また、不明な点は、関西館文献提供課複写貸出係までお問い合わせください。

複写に関するお問い合わせ　0774-98-1313（直通）
利用者登録、貸出しに関するお問い合わせ　0774-98-1312（直通）

お知らせ

NDL-OPAC のインターネットサービス時間延長

システム機器の更新と運用方法の見直しに伴い、平成19年１月８日（月）からサービス停止時間を従来の３時間から１時間30分に短縮し、稼働時間を延長いたします。

これにより、海外の利用者、特にサービス停止時間が昼間にあたる北米地域での利便性の向上が見込まれます。

NDL-OPAC のインターネットサービスの稼働時間

現　　在	平成19年１月８日～
月～土　7：00～翌日４：00（28：00） 日　　7：00～翌日１：00（25：00） （第３日曜は22：00まで）	月～土　7：00～翌日５：30（29：30） 日　　7：00～翌日１：00（25：00） （第３日曜は22：00まで）

ご案内

平成18年度　レファレンス研修

公共図書館および大学図書館においてレファレンス業務を担当する中堅職員を対象に、次のとおり平成18年度レファレンス研修を実施します。

目　的　レファレンス・サービスを遂行する上での問題解決に役立つ実務的研修を実施し、レファレンスの実務能力の向上を図る。

期　間　平成19年３月１日（木）～ ２日（金）

会　場　国立国会図書館東京本館　研修室

対　象　レファレンス業務に従事しており、業務経験５年以上の公共図書館および大学図書館職員。１機関１名。定員20名。応募多数の場合は調整します。

内　容　レファレンスのプロセス、インタビュー、コレクション形成（明治大学文学部助教授　齋藤泰則氏）。人文系レファレンス・ツール紹介。レファレンス記録作成の基本的な考え方。インターネット情報源とレファレンス。ワークショップ：レファレンス・プロセスの評価・分析。
＊特記以外、講師は当館職員。研修参加者には事前課題を課します。

詳細・申込方法

当館ホームページ（http://www.ndl.go.jp/－「図書館員のページ」－「図書館へのお知らせ」）に掲載の申込書に記入の上、FAX または郵送で平成19年１月10日（水）までに下記あてにお申し込みください（必着）。

申込み・問い合わせ先

国立国会図書館関西館事業部図書館協力課研修交流係（担当：上川）
〒619-0287 京都府相楽郡精華町精華台８-１-３
FAX 0774-94-9117　　TEL 0774-98-1446

報の需要も高まってきていますが、現地語資料の所蔵が少ない中央アジアの情報は "Казахстан и Россия в цифрах"（『数字に見るカザフスタンとロシア』）"Кыргызстан в цифрах"（『数字に見るキルギスタン』）などのロシア語の統計集で得ることができます。国連出版物の "The Arab Human Development Report" など社会情勢を詳しく分析した資料も数多くあります。

また、現地語史料を校訂し欧米語タイトルで出版したものもあり、たとえば M. J. de Goeje による "Annales, quos scripsit Abu Djafar Mohammed ibn Djarir at-Tabari" にはタバリーの有名なアラビア語の年代記 "تأريخ الرسل والملوك"（『使徒たちと諸王の歴史』）が収められています。

○雑　誌

継続収集しているものは多くありませんが、イランの "ارمغان"（『贈物』）（当館所蔵：1919-1978年）、"مهر"（『太陽』）（当館所蔵：1933-1967年）などは、長期にわたって所蔵しており貴重なコレクションとなっています。また、戦前の在日タタール人により「世界ノ回教諸國ニ［日本］ヲ紹介スル唯一ノ雑誌」と銘打たれて発行された "یاپون مخبری = Yapon Mohbiri"（『日本通信』）など興味深いものがあります。

○図書館情報学関係

ペルシャ語と英語を対照させた図書館用語辞典、世界各地のアラビア文字言語の写本目録などの参考図書や、Türk Kütüphaneciler Derneği（トルコ図書館員協会）の出版物を所蔵しています。

＜検索方法＞

資料の種類や整理した時期によって、所蔵館や検索ツールが異なります。詳しくは右の表をご覧ください。網掛けした部分は、東京本館で所蔵している資料です。

	整　理	アジア諸言語（ベトナム語、モンゴル語 インドネシア語・マレーシア語）	アジア諸言語（その他）	日本語 欧米言語
図書	～1985年	NDL－OPAC*1		NDL－OPAC
	1986年～	アジア言語 OPAC*2	冊子目録*3、カード目録	
雑誌・年鑑、新聞		NDL－OPAC		

*1　ローマ字以外の文字を使用する言語は ALA-LC 方式でローマ字に翻字して検索します。
*2　アラビア語、ペルシャ語、ヒンディー語等の図書データも順次搭載する予定です。
*3　冊子目録については、アジア情報室ホームページ「アジア関係資料の検索」（http://www.ndl.go.jp/jp/service/kansai/asia/contents/asia_03serch.html）でご紹介しています。

（関西館資料部アジア情報課　小笠原（おがさわら）　綾（あや）・邊見（へんみ）　由起子（ゆきこ）・大西（おおにし）　啓子（けいこ））

पुस्तकों का संक्षिप्त विवरण "（『ヒンディー語写本の簡単な報告』）などを所蔵しています。また、"Cataloguing of Indic names in AACR-2 : a study" は、インド人の姓名の意味や構成を地域別に解説し、代表的な姓名のリストも掲載されているため、著者標目決定の参考になる資料です。

＜中東・北アフリカ、中央アジア等＞

○図　書

ペルシャ語資料は約40％を言語・文学関係が占め、デフホダーの "لغت نامه"（『辞典』）などのペルシャ語辞典や、フィルドウシーの "شاهنامه"（『王書』）をはじめニザーミー、ハーフィズ、サアディーなど著名な古典文学者の作品や研究書を所蔵しています。次いで歴史・地理関係が、25％を占めています。また、宗教関係にはイスラームだけでなくゾロアスター教についての資料も含まれています。

アラビア語資料は歴史・地理、宗教、言語・文学等、人文系分野をバランスよく所蔵しています。イスラームについてはクルアーン注釈やハディース、哲学、神学、法学、神秘主義についての基本的な古典文献を所蔵しています。とくに法学関係は珍しいものが多く、1910年にモロッコで出版されたマーリク派の "المعيار الجديد"（『新しい尺度』）、1883年にエジプトで出版されたハナフィー派の "الفتاوى المهدية في الوقائع المصرية"（『エジプトの出来事についてのマフディーのファトワー集』）などがあります。小口カバーのついた西アジア特有の装丁の資料や、19世紀エジプトで盛んに行われた活版印刷で、特徴ある版面をもつブーラーク版など製本や印刷の面で興味深い資料もあります。また、福沢諭吉『福翁自伝』や吉本ばなな『つぐみ』のアラビア語訳など日本関係の資料も所蔵しています。

トルコ語資料は圧倒的に歴史・地理分野が多く、古代オリエントの時代から現代のトルコ共和国までを扱った資料を幅広く所蔵しています。なかでも数が多いのはトルコ歴史学協会（Türk Tarih Kurumu）の出版物です。"صولاق زاده تاريخى"（『ソラクザーデの年代記』）などのオスマントルコ語史料も所蔵しています。次いで所蔵が多いのが言語・文学関係で、 カーシュガリーの "Divanü lûgat-it-Türk"（『チュルク諸語辞典』）やトルコ文学の最も古い作品 "Kutadgu Bilig"（『幸福に関する智恵』）などがあります。

モンゴル語資料は言語・文学、歴史・地理分野が約60％を占めますが、馬の百科事典や、草原の植生や馬の飼料となる草花についての本、モンゴル伝統医学など、科学技術関係も所蔵しています。

"تاريخ الكامل"（『歴史全書』）小口カバーのついた装丁のなされた資料。ブーラーク版特有の縦長の枠の中に本文、余白に別の歴史書が印刷されている。

近年は統計資料やビジネス情

書館関係の雑誌では、図書館界の動向を伝える "Tập san thư viện"（『図書館集刊』）や "Tạp chí thư viện Việt Nam"（『ベトナムの図書館』）のほか、文化芸術関係の "Thông tin văn hóa nghệ thuật"（『文化芸術通信』）を所蔵しています。

＜南アジア＞

南アジア地域の場合、スリランカを除いて、学術的な研究成果は英語で発表されることが多いため、英語文献が重要な地位を占めています。

当館では、各省庁の年報や調査報告書など、政府機関による出版物を積極的に収集しています。工業、農業、教育、公衆衛生など、内容は多岐にわたっています。

○図　書

欧米言語図書は、現地発行のものも含めて約2,500冊所蔵しており、そのうち約70％がインドに関する資料です。内容は、経済・統計関係が一番多く、続いて歴史・地理、宗教・思想、文学・芸術等の分野を所蔵しています。中でも地域研究において重要な資料として国勢調査（census）が挙げられます。これは、様々な主題における基本的な文献で、インドをはじめ主要な国のものを所蔵しています。

ヒンディー語図書の中には、在日本インド大使館から寄贈された資料が多く含まれています。ほとんどが人文分野で、このうち約60％が文学作品や文学評論です。民族運動高揚期にウルドゥー語やヒンディー語で精力的に作家活動を行ったプレームチャンドなど、近現代の作家による作品が中心です。文学に次いで多いのが、辞書を含む言語学関係と、宗教・思想関係です。

美術関係では、"मिथिला की सांस्कृतिक लोकचित्रकला"（『ミティラー文化の民衆絵画』）のように、モチーフをカラー図版付きで解説した、見た目に楽しい資料も所蔵しています。また、1950年代から60年代にヒンディー語で書かれた、高等学校レベルの社会科や歴史の教科書を数点所蔵しています。

○雑誌・年鑑

図書に比べてタイトル数、分野とも充実しています。"आजकल"（『今日』）などの一般誌、"Journal of the asiatic society of Mumbai" などの学術雑誌のほか、宗教・哲学関係誌や経済誌、科学技術関係誌を所蔵しています。

中でも、イギリス東インド会社に関する議事録 "Proceedings relative to ships tendered for the service of the United East-India Company"（当館所蔵：1780－91、1798－99年）や、カルカッタ自動車販売協会が発行していた "The Auto Age"（当館所蔵：1963－83年）などの業界誌は、国内では所蔵機関の少ない資料です。

○図書館情報学関係

南アジアのうち特にインドでは、図書館情報学関係の資料が多く出版されており、研究書のほか、4,000件以上の図書館を収録する "Directory of libraries in Delhi" や、ヒンディー語普及協会が1950－55年に収集した写本のリスト "हस्तलिखित हिंदी

本館議会官庁資料室、児童書は国際子ども図書館で所蔵しています。

＜東南アジア＞

現地出版物を効率的に収集するため、1998年から米国議会図書館（LC）の東南アジア共同収集プログラム（CAP-SEA）に参加しています。これは、参加館の収集希望をもとにLCジャカルタ事務所が一括して現地での収集活動を行う仕組みです。図書については発行国、分野、言語などによって分けられた項目の中から希望する項目を、雑誌についてはタイトルリストから希望するタイトルを選択します。参加館は選択範囲に応じて収集活動に必要な費用を負担することになっています。現在当館は9か国（フィリピン、インドネシア、シンガポール、マレーシア、ブルネイ、タイ、ベトナム、ラオス、カンボジア）の資料をCAP-SEAにより収集しており、一般には入手の困難な政府刊行物や地方出版物も収集可能です。

○図　書

当館で所蔵する現地語図書は、歴史・文学などの人文分野の占める割合が大きく、例えばタイ語資料では、タイ近代史学を拓いたダムロン親王の著作のほか、『三国志演義』の訳本で散文小説の先駆けとなった "สามก๊ก"（『三国』）、詩人スントーンプーの作品や、タイで最初の著作権売買作品として知られるモーム・ラーチョータイの "นิราศลอนดอน"（『ロンドン紀行詩』）など著名な古典文献を所蔵しています。このほか、自然科学分野では、東南アジア固有の植物、魚類、昆虫の図鑑を所蔵しています。

事典類としては、"สารานุกรมไทย ฉบับราชบัณฑิตยสถาน"（『タイ学士院版百科事典』）のように権威がある総合百科事典から、文化、芸術、宗教など各主題別の事典まで幅広く所蔵しています。

○雑誌・年鑑

例えばインドネシア語では、"Tempo"（『時』）、"Gatra"（『節』）、"Warta ekonomi"（『経済ニュース』）などの主要誌のほか、大衆向け女性誌 "Femina"（『女性』）も所蔵しています。写真や広告を含めて時代を反映する資料といえます。

タイ語雑誌は、1990年代以降発行のものを多く所蔵していますが、南満州鉄道株式会社東亜経済調査局が1941年からの数年間に収集した資料も所蔵しています。その中の "วรรณคดีสาร"（『文学ジャーナル』）や " เอกชน"（『私人』）は、第二次世界大戦下のタイでの言論統制や作家たちの創作活動がうかがえる資料として貴重です。

統計については各国の総合統計を所蔵するほか、例えばラオス政府観光局の "Statistical report on tourism in Laos" のように産業別、分野別の統計についても充実を図っています。政府機関の出版物や年鑑は統計情報を得る上でも有用です。

○図書館情報学関係

各国の主要な図書館の出版物は重点的に収集しています。例えば、ベトナム国家図

関西館の資料紹介

第12回　アジア資料―諸地域資料―

【連載目次】

1．科学技術資料－はじめに（538号）
2．洋雑誌（539号）
3．国内博士論文（540号）
4．文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書（541号）
5～9．科学技術資料－海外博士論文ほか（542号）～（546号）
10．アジア資料－中国語資料（547号）
11．アジア資料－朝鮮語資料（548号）
12．アジア資料－諸地域資料（本号）
13．アジア資料－アジアの新聞（次号）

＜はじめに＞

関西館アジア情報課が対象としているアジア地域は、日本を除く東アジアから、アフリカのサハラ砂漠より北の国々までです。当館では、中国、韓国、北朝鮮以外のアジア地域を諸地域としています。本稿では、＜東南アジア＞、＜南アジア＞、＜中東・北アフリカ、中央アジア等＞ の３つの地域に分けて、図書、雑誌・年鑑をご紹介します。新聞については次号でご紹介します。

＜所蔵資料概要＞

アジア諸地域に関する資料は、人文、社会科学分野を中心に、参考図書、古典的文献、研究書等を所蔵しています。各地域の現地語資料に加えて、日本語、欧米言語資料も収集しています。各国の国立図書館等と国際交換を行っているので、政府刊行物や、各国の全国書誌を所蔵している点が当館の特徴です。また、図書館情報学関係の資料は力を入れて収集しています。本稿では地域ごとに項目を立ててご紹介します。

関西館所蔵の現地語資料は右の表のとおりですが、1985年以前に受け入れ、整理した図書は東京本館で所蔵しています（38ページ検索方法参照）。なお、年代に関わらず、法令議会資料は東京

関西館所蔵アジア言語資料
（中国語、朝鮮語を除いた概数。2006年10月現在。）

地域	言語	図書 [単位：冊]	雑誌・年鑑 ( )は継続中 [単位：タイトル]	
東アジア	モンゴル語	600	18	(4)
東南アジア	インドネシア語	4,250	172	(43)
	マレーシア語			
	ベトナム語	2,130	128	(60)
	タイ語	2,200	78	(19)
	ビルマ語	1,500	111	(2)
	タガログ語	150	13	(2)
南アジア	ヒンディー語	800	10	(4)
	ベンガル語	120	2	0
	ウルドゥー語	80	1	0
中東・北アフリカ	ペルシャ語	2,800	58	(10)
	アラビア語	2,220	56	(7)
	トルコ語	1,000	27	(4)
その他		650	15	(14)
合計		18,500	689	(169)

国会図書館長が認める職及び国立国会図書館長が定める職に関する件の一部を改正する件（平成18館長決定１）　541 ④：29
国立国会図書館文書決裁内規及び国立国会図書館統計内規の一部を改正する内規（平成18内規８）　548 ⑪：22-23
国立国会図書館文書決裁内規の一部を改正する内規（平成18内規３）　541 ④：27
児童ポルノに該当するおそれのある資料についての国立国会図書館資料制限措置等に関する内規の特例に関する内規（平成18内規４）　541 ④：27-29
選書協力員に関する件の一部を改正する件（平成18館長決定７）　548 ⑪：30-31
複写料金に関する件の一部を改正する件（平成18告示１）　548 ⑪：22
レファレンス協同データベース事業の企画協力員の設置に関する内規（平成18内規２）　541 ④：27

おもな人事

おもな人事　538 ①：21／540 ③：26／541 ④：33-35／543 ⑥：12-13／544 ⑦：15／545 ⑧：22／546 ⑨：22／547 ⑩：32／548 ⑪：31
感謝状の贈呈　541 ④：36
職員の採用　542 ⑤：21／543 ⑥：14／544 ⑦：16／545 ⑧：22
職員の出向　541 ④：35／544 ⑦：15
職員の退職　538 ①：21／541 ④：35-36／544 ⑦：16／545 ⑧：22／546 ⑨：22
職員の転任　541 ④：35／543 ⑥：14／544 ⑦：15-16／547 ⑩：32
職員の表彰　543 ⑥：13
専門調査員の退職　541 ④：35
平成18年秋の叙勲　548 ⑪：31
平成18年春の叙勲　542 ⑤：21
元職員に対する叙位　538 ①：21／543 ⑥：13／544 ⑦：15
元職員に対する叙位および叙勲　540 ③：26

遠客近客

539②：25-26／542⑤：23／543⑥：15／545⑧：22-23／548⑪：31-33

財政金融課　545 ⑧： 12
電子図書館課　546 ⑨： 15
総務課広報係　547 ⑩： 24
衆議院調査局財務金融調査室（人事交流編）　548 ⑪： 11
IFLA（展示ブース）　549 ⑫： 25

常設展示のお知らせ

第142回　経済誌から見た戦前―関東大震災・昭和恐慌・二・二六事件―　539 ②： 13
第143回　日本の「美しき時代」―大正時代に生まれたもの―　541 ④： 37
第144回　「本屋にない本」より　543 ⑥： 10
第145回　「外食」の歴史　545 ⑧： 12
再展示　第114回　洋裁の歴史　547 ⑩： 24
特別展示　旧帝国図書館建築100周年記念展示会　548 ⑪：34／549 ⑫： 25

法規等の制定・改正

学術文献録音員に関する件を廃止する件（平成18館長決定２）　541 ④： 29
国立国会図書館国会サービス要領及び国立国会図書館国会分館奉仕要領の一部を改正する件（平成18館長決定６）　548 ⑪： 30
国立国会図書館国会サービス要領の一部を改正する件（平成18館長決定４）　547 ⑩： 32
国立国会図書館事務分掌内規及び国立国会図書館文書決裁内規の一部を改正する内規（平成18内規７）　547 ⑩： 31- 32
国立国会図書館事務分掌内規の一部を改正する内規（平成18内規５）　541 ④： 30- 32
国立国会図書館事務分掌内規の一部を改正する内規（平成18内規９）　548 ⑪： 26- 30
国立国会図書館職員定員規程の一部を改正する規程（平成18規程１）　541 ④： 32
国立国会図書館職員の勤務時間、休暇等に関する件の一部を改正する件（平成18館長決定３）　544 ⑦： 15
国立国会図書館職員の倫理の保持に関する内規の一部を改正する内規（平成18内規６）　541 ④： 33
国立国会図書館職員倫理規程の一部を改正する規程（平成18規程２）　541 ④： 32- 33
国立国会図書館資料利用規則及び国立国会図書館国際子ども図書館資料利用規則の一部を改正する規則（平成18規則３）　548 ⑪： 20- 22
国立国会図書館組織規則の一部を改正する規則（平成18規則１）　541 ④： 29- 30
国立国会図書館組織規則の一部を改正する規則（平成18規則２）　547 ⑩： 31
国立国会図書館組織規則の一部を改正する規則（平成18規則４）　548 ⑪： 24- 26
国立国会図書館組織規程の一部を改正する規程（平成18規程３）　548 ⑪： 23- 24
国立国会図書館展示委員会内規の一部を改正する内規（平成18内規１）　541 ④： 26- 27
国立国会図書館において使用する目録規則、分類表及び件名標目表に関する件の一部を改正する件（平成18館長決定５）　548 ⑪： 23
国立国会図書館に技術主任を置くの件及び給料の特別調整額に関する件に規定する国立

No.8　ホーレン　（奥野諒子）549 ⑫： 54

本屋にない本

『「赤い鳥」と「少年倶楽部」の世界』
山梨県立文学館編・刊　（平岡章夫）541 ④： 14- 15
『あきないの民俗－看板・引札・ちらし　企画展図録』
仙台市市民文化事業団仙台市歴史民俗資料館編　仙台市教育委員会刊
（大月晶代）543 ⑥： 11- 12
『石坂荘作と「基隆夜学校」 日本統治期台湾における一私立学校の歩み』
宇治郷毅著　（木下路子）542 ⑤： 22- 23
『浮世絵の楽器たち　特別展』
茂手木潔子監修、浮世絵太田記念美術館編・刊　（嶋本裕子）546 ⑨： 8- 9
『江戸の外国公使館　開国150周年記念資料集』
港区立港郷土資料館編　（岡田　悟）546 ⑨： 7- 8
『株式会社三越100年の記録　デパートメントストア宣言から100年　1904－2004』
三越本社コーポレートコミュニケーション部資料編纂担当編　三越刊
（落美都里）544 ⑦： 12- 13
『暦の世界へ　平成17年度企画展』
新宿区生涯学習財団新宿歴史博物館編　（平田紀子）548 ⑪： 19
『里内勝治郎と里内文庫』
栗東歴史民俗博物館編・刊　（吉川博史）549 ⑫： 29
『自衛隊施設内の歴史的建造物　明治・大正編』
防衛施設技術協会編　（牛島靖欧）547 ⑩： 25
『染型紙　江戸～明治期における筑後柳川の染色用型紙』
江崎栄一編　（伊藤直美）538 ①： 20- 21
『大鑑・巨砲ヲ造ル　江戸時代の科学技術　開館１周年記念平成17年度佐賀城本丸
歴史館企画展』　佐賀県立佐賀城本丸歴史館編　（伊東祐介）545 ⑧： 24
『ホタル点滅の不思議　地球の奇跡』
大場信義編著・写真　横須賀市自然・人文博物館刊　（前川直之）540 ③： 27- 28
『よこはまの浦島太郎　開館 10 周年記念特別展』
横浜市歴史博物館編　（澤井優子）549 ⑫： 28
『龍勢の系譜と起源　世界のバンブーロケット』
野外調査研究所編　吉田町教育委員会刊　（伊東祐介）539 ②： 24

館内スコープ

国会レファレンス課　538 ①： 14
複写課遠隔複写係　539 ②： 13
総務課文書係　540 ③： 11
関西館事業部図書館協力課調査情報係　541 ④： 37
音楽・映像資料室　542 ⑤： 19
書誌部逐次刊行物課索引係　543 ⑥： 10
情報システム課運用係　544 ⑦： 14

-463- Extract of annual report of the Tokyo Library, Japan, 1891.
（鈴木宏宗）546 ⑨：口絵
-464- 『諸名流美羅集』 （川本　勉）547 ⑩：口絵
-465- J.H.S.フォルメイ『少数でより抜きの蔵書を作るための助言』(1750)
（折田洋晴）548 ⑪：口絵
-466- 「やよひのうた」中島広足自筆『後夢路日記』所収
（上田由紀美）549 ⑫：口絵

本を魅せる　常設展示案内

(17) なゐふる－地震を科学する－（奥田倫子、中村淳一、藤井朋子）538 ①： 30
(18) 経済誌から見た戦前－関東大震災・昭和恐慌・二・二六事件－
（青山真紀、大山　聡、小針泰介）540 ③： 40
(19) 日本の「美しき時代」－大正時代に生まれたもの－
（大森寿恵、田中亮之介、松井美樹）542 ⑤： 40
(20) 「本屋にない本」から―納本制度が可能にする資料収集―
（石澤　文、奥田倫子、藤井朋子）544 ⑦： 26
(21) 外食の歴史 （小幡竜志、刈田朋子、小針泰介）546 ⑨： 34

電子図書館サービスのページ

第16回　情報資源に関する情報の充実：ナレッジデータベース
（福林靖博）538 ①： 29- 28
第17回　どこまでできる？デジタル情報のワンストップポータル：デジタルアーカイブポータル （吉田　暁）539 ②： 31- 30
第18回（最終回）　電子図書館とメタデータ （久古聡美）540 ③： 39- 38

関西館の資料紹介

第１回　科学技術資料―はじめに （福田　理）538 ①： 27- 26
第２回　洋雑誌 （小林一春）539 ②： 29- 28
第３回　国内博士論文 （福田　亮）540 ③： 37- 34
第４回　文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書 （立松真希子）541 ④： 47- 43
第５回　科学技術資料―海外博士論文 （福田　亮）542 ⑤： 39- 36
第６回　科学技術資料―欧文会議録 （山下ユミ）543 ⑥： 48- 44
第７回　科学技術資料―学協会ペーパー （山下ユミ）544 ⑦： 25- 22
第８回　科学技術資料―テクニカルレポート （清水真澄）545 ⑧： 35- 31
第９回　科学技術資料―規格資料 （清水真澄）546 ⑨： 33- 30
第10回　アジア資料―中国語資料 （前田直俊）547 ⑩： 46- 42
第11回　アジア資料―朝鮮語資料 （山本健太郎）548 ⑪： 40- 36
第12回　アジア資料―諸地域資料（小笠原綾、邊見由起子、大西啓子）549 ⑫： 42- 38

ビジュアル国立国会図書館博物館

No.6　求覧券 （清水悦子）539 ②： 32
No.7　代本板 （高橋良平）545 ⑧： 36

平成18年度アジア情報研修　545 ⑧： 29
平成18年度国立国会図書館職員採用試験の実施について　540 ③： 22- 25
平成18年度　児童文学連続講座－国際子ども図書館所蔵資料を使って　544 ⑦： 16
平成18年度　資料電子化研修　544 ⑦： 18
平成18年度日本古典籍講習会　545 ⑧： 28
平成 18 年度レファレンス研修　549 ⑫： 37
利用者アンケート調査へのご協力のお願い　544 ⑦： 21
IFLA ソウル大会プレコンファレンス「アジアにおける資料保存」を開催します
543 ⑥： 43- 42
NACSIS-ILL 経由・総合目録ネットワーク経由の複写・貸出しの申込中止について
548 ⑪：33／549 ⑫： 36
NDL-OPAC で地形図が検索できます　541 ④： 42
NDL-OPAC のインターネットサービス時間延長　549 ⑫： 37
WARP が事業化され、 収集コンテンツ内容本文の検索が可能となりました
544 ⑦： 18

国立国会図書館の編集・刊行物

外国の立法　立法情報・翻訳・解説　第226号～第229号
538 ①：24-25／541 ④：15／544 ⑦：12／546 ⑨： 22- 23
カレントアウェアネス　287号～290号
540 ③：26／543 ⑥：14／546 ⑨：23／549 ⑫： 30- 31
公開シンポジウム記録「デジタル時代における図書館の変革－課題と展望－」
549 ⑫： 32- 33
国立国会図書館の編集・刊行物　入手案内　539 ②：別刷12頁
参考書誌研究　第63～65号　538 ①：24／542 ⑤：21／549 ⑫： 31- 32
スマトラ沖地震・津波による文書遺産の被災と復興支援－平成17年度国立国会図書館
公開セミナー記録集－（図書館研究シリーズ　No.39）　547 ⑩： 33
全国書誌通信　第123号～第125号　540 ③：26／545 ⑧：22／548 ⑪： 31
レファレンス　第659号～第670号　毎号
J-BISC　DVD 版更新版　543 ⑥： 14
NDL CD-ROM Line　点字図書・録音図書全国総合目録 2006年 1 号　547 ⑩： 33

稀本あれこれ

-455- 『好色一代男』 大坂版と江戸版　（間島由美子）538 ①：口絵
-456- J.J.マデル編『図書館・文書館論集』J.A.シュミットによる第 2 版（1702）
（折田洋晴）539 ②：口絵
-457- ［植物学用語対訳帳］（『植學譯筌』草稿） 一綴　（膝舘寿巳恵）540 ③：口絵
-458- 『錦窠魚譜』－シーボルト自筆の鑑定書き－　（田中俊洋）541 ④：口絵
-459- アントニオ・デ・エレーラ『世界総合史』　（白岩一彦）542 ⑤：口絵
-460- 新見正路覚書『打聞』　（大沼宜規）543 ⑥：口絵
-461- 明朝紫硯　（間島由美子）544 ⑦：口絵
-462- 「絵新聞日本地画稿」（『水茎無類記』の内）　（藤元直樹）545 ⑧：口絵

公開セミナー「プランゲ文庫をめぐる新展開－日本占領期出版物の継承と発展－」
　のご案内　538 ①： 19
国際子ども図書館　学校図書館セット貸出し「世界を知るセット」（小学校高学年向）
　の貸出開始について　549 ⑫： 36
国際子ども図書館　５月の連休の状況－２日間で3,000名を超える来館 543 ⑥： 39
国際子ども図書館展示会「大空を見上げたら－太陽、月、星の本」の開催について
　549 ⑫： 35
国際子ども図書館展示会「北欧からのおくりもの－子どもの本のあゆみ」
　開催について　542 ⑤： 35- 34
国際子ども図書館展示会「北欧からのおくりもの－子どもの本のあゆみ」
　関連講演会等について　546 ⑨： 24
国際子ども図書館展示会「北欧からのおくりもの－子どもの本のあゆみ」
　関連催物について　547 ⑩： 36
国際子ども図書館展示会「もじゃもじゃペーターとドイツの子どもの本」
　540 ③： 31- 30
国際子ども図書館　夏休み催物「科学あそび」いろいろな音を楽しもう
　～身近なもので楽器作り　543 ⑥： 39
国立国会図書館遠隔研修を開始しました　543 ⑥： 41
国立国会図書館件名標目表2005年度版を更新　543 ⑥： 38
国立国会図書館件名標目表（NDLSH）のテキストデータの実験的提供を開始しました
　546 ⑨： 25
国立国会図書館データベースフォーラム開催　547 ⑩： 34
国立国会図書館における省エネルギー対策について　544 ⑦： 21
子ども霞が関見学デーのお知らせ　543 ⑥： 38
「子どものためのこどもの日おたのしみ会」 開催のお知らせ　540 ③： 29
こどもの日に、絵本ギャラリー「江戸絵本とジャポニズム」
　「子どもの本　イメージの伝承」を提供　542 ⑤： 33
社史・団体史等ご刊行に際してのお願い　538 ①：15／542 ⑤： 32
第８回図書館総合展に出展します　547 ⑩： 35
第10回　資料保存研修のご案内　544 ⑦： 17
「帝国議会会議録検索システム」の公開データを追加　540 ③： 33- 32
展示会関連ギャラリートークの開催について　544 ⑦： 19
電子展示会「史料にみる日本の近代」の提供開始　544 ⑦： 20
東京本館および関西館の資料整理休館日の臨時変更について
　538 ①：25／539 ②： 27
東京本館における電子情報サービスの一部休止について　545 ⑧：30／546 ⑨： 23
登録利用者の皆様へのご注意　545 ⑧： 30
図書館間貸出資料のご利用方法の変更について　547 ⑩： 34
図書館に関する調査・研究をお手伝いします－"Current Awareness Portal" 提供開始－
　543 ⑥： 40
年末年始のサービス休止について　548 ⑪：35／549 ⑫： 34
８月18日の国際子ども図書館の閉館時間が変わります　544 ⑦： 19

韓国国会図書館との第3回業務交流の終了について　538 ①： 22- 23
「関西館見学デー」の実施　549 ⑫： 33
公開シンポジウム「デジタル時代における図書館の変革－課題と展望－」の終了　540 ③： 28
公開セミナー「スマトラ沖地震・津波による文書遺産の被災と復興支援」の終了　538 ①： 23- 24
公開セミナー「プランゲ文庫をめぐる新展開－日本占領期出版物の継承と発展－」の終了　540 ③： 28- 29
国際図書館連盟資料保存コア活動（IFLA/PAC）センター長会議および資料保存シンポジウム　541 ④： 36
国立国会図書館総合目録ネットワーク研修会の開催　545 ⑧： 13
子ども霞が関見学デー　546 ⑨： 9
第2回レファレンス協同データベース・システム研修会の開催　549 ⑫： 30
第7回CO-EXIST-SEA（東南アジア科学技術情報の経験・専門知識交換協力プログラム）ワークショップ　538 ①： 23
第8回国際アジア電子図書館会議　538 ①： 24
第8回図書館総合展　549 ⑫： 33
第10回資料保存研修「あなたにもできる図書館資料の保護と補修」の開催　549 ⑫： 30
第25回日中業務交流の終了について　538 ①： 22
第30回国際児童図書評議会（IBBY）世界大会　548 ⑪： 12
第31回ISSNセンター長会議　548 ⑪： 13
日本資料専門家欧州会議（EAJRS）第17回年次大会　548 ⑪： 13
ニューヨーク・パブリック・ライブラリー主催「Ehon（絵本）」展シンポジウムに参加　549 ⑫： 32
ブリンドリー英国図書館長と当館幹部職員との懇談会を開催　540 ③： 28
平成17年度アジア情報研修の開催　538 ①： 22
「平成17年度視覚障害者サービス実施機関との懇談会」　541 ④： 36
平成18年度アジア情報研修の開催　549 ⑫： 31
平成18年度科学技術資料研修－専門資料群とテーマ別情報源－の終了　549 ⑫： 34
平成18年度国際子ども図書館連絡会議の開催　545 ⑧： 13
平成18年度児童文学連続講座－国際子ども図書館所蔵資料を使って－」の終了について　549 ⑫： 31
平成18年度第1回中央館・支部図書館協議会の終了について　545 ⑧： 13

〈お知らせ〉・各種案内記事

アンケート調査へのご協力のお願い　545 ⑧： 30
関西館小展示 「人をサポートするロボット－医療・福祉用ロボット－」開催　548 ⑪： 34
『旧帝国図書館』建築100周年を迎えました！　542 ⑤： 34
近代デジタルライブラリー、明治期刊行図書約67,000冊を追加公開　541 ④： 48

中性紙使用の定着化を確認－第18回新刊資料中性紙使用率調査結果報告－
（収集部資料保存課）542 ⑤： 26- 31
電子展示会「史料にみる日本の近代－開国から講和まで100年の軌跡－」を監修して
（佐々木隆）547 ⑩： 14- 15
特別展示「描かれた動物・植物－江戸時代の博物誌－」を終えて
（特別展示小委員会）539 ②： 19
奈良県立図書情報館開館～想いをかたちに～ （中野貴世子）541 ④： 38- 41
フィンランド国立図書館長カイ・エクホルム博士招へいの概要
（総務部支部図書館・協力課）541 ④： 22- 23
米国議会図書館副館長ディアナ・マーカム博士招へいの概要
（総務部支部図書館・協力課）546 ⑨： 16- 17
米国地図図書館訪問記 （津田深雪）548 ⑪： 14- 17
米国の連邦政府図書館の現況 （ローラーミカ）547 ⑩： 16- 23
平成17年度科学技術資料研修－国立国会図書館の所蔵資料を中心に－
（関西館事業部図書館協力課）538 ①： 17
平成17年度国立国会図書館長と行政・司法各部門支部図書館長との懇談会
（総務部支部図書館・協力課）538 ①： 16
平成17年度書誌調整連絡会議報告 （書誌部書誌調整課）539 ②： 14- 18
平成17年度日本研究情報専門家研修を開催して （小島和規）540 ③： 12- 13
平成17年度日本古典籍講習会 （関西館事業部図書館協力課）540 ③： 14
平成17年度法令議会資料・官庁資料研修（関西館事業部図書館協力課）541 ④： 21
平成17年度レファレンス研修 （関西館事業部図書館協力課）541 ④： 20
平成18年度国立国会図書館長と大学図書館長との懇談会について
（総務部支部図書館・協力課）549 ⑫： 26- 27
平成18年度国立国会図書館長と都道府県立及び政令指定都市立図書館長との懇談会について （総務部支部図書館・協力課）545 ⑧： 20- 21
平成18年度 国立国会図書館の活動評価
－平成17年度の評価結果の公表と新目標等の設定－（総務部企画課）543 ⑥： 16- 37
平成17年度サービス基準評価 543 ⑥： 35- 32
平成18年度サービス基準 543 ⑥： 37- 36
平成18年度資料電子化研修 （関西館事業部図書館協力課）548 ⑪： 18
平成18年度の図書館員を対象とする研修計画について
（関西館事業部図書館協力課）542 ⑤： 24- 25
より身近で役立つ存在へ－国立国会図書館におけるサービス向上への取組み－
（総務部企画課）541 ④： 1- 3
来館利用者から見た国立国会図書館－平成17年度利用者アンケート調査の結果から
（総務部企画課）540 ③： 15- 21

NDL news 当館の最近の動き

アジア学会（AAS）・東亜図書館協会（CEAL）2006年年次総会および北米日本研究資料調整協議会（NCC）会議 542 ⑤： 21
韓国国立中央図書館との第10回業務交流の終了について 548 ⑪： 13

韓国国会図書館との業務交流（第３回）－国会サービスの改善のために－
（岩澤　聡）540 ③：　5- 10
旧帝国図書館建築100周年記念行事の開催にあたって
（国際子ども図書館）545 ⑧：25- 27
公開シンポジウム「デジタル時代における図書館の変革－課題と展望－」
（総務部企画課）543 ⑥：　1-　9
国立国会図書館年報（平成17年度）から－統計を中心に　その１－　546 ⑨：29- 26
国立国会図書館年報（平成17年度）から－統計を中心に　その２－　547 ⑩：41- 37
国立国会図書館の第二期科学技術情報整備基本計画
（主題情報部科学技術・経済課）545 ⑧：14- 19
第二期科学技術情報整備基本計画（概要）　545 ⑧：17- 19
国立国会図書館の平成18年度予算について　（総務部会計課）541 ④：24- 25
国立国会図書館の役割について　（総務部総務課）540 ③：　1-　4
これからの国会サービス－「立法府のブレーン」と「国会議員のための情報センター」をめざして　（齋藤憲司）538 ①：　4- 13
在外研究報告　ジョージタウン大学公共政策大学院　（西川明子）546 ⑨：18- 21
上海新華書店旧蔵書遡及入力の終了について
（関西館資料部アジア情報課）547 ⑩：26- 27
10月からの新サービス　547 ⑩：28- 30
東京本館における電子情報提供サービスの改善について
（主題情報部参考企画課）547 ⑩：28
プランゲ文庫図書マイクロフィルム化共同事業（第１期）による児童書マイクロフィルムの利用提供開始について　（国際子ども図書館）547 ⑩：29
平成18年10月23日から、複写料金を改定します　547 ⑩：30
新指定貴重書および準貴重書について－第38回貴重書等指定委員会－
（貴重書等指定委員会）544 ⑦：　4- 11
和書の部　544 ⑦：　4-　7
洋書の部　544 ⑦：11-　8
進展する国立国会図書館の遠隔利用サービス～遠隔複写利用の現況と展望～
（関西館資料部文献提供課）546 ⑨：　1-　3
新年のごあいさつ　（黒澤隆雄）538 ①：　1-　3
第１回「国立国会図書館と大学図書館との連絡会」開催
（総務部支部図書館・協力課）541 ④：18
「第13回総合目録ネットワーク参加館フォーラム」報告
（関西館事業部図書館協力課）541 ④：19
第14回アジア・オセアニア地域国立図書館長会議および第13回東南アジア図書館人会議に参加して　（坂本　博）544 ⑦：　1-　3
第25回日中業務交流報告　デジタル資源の収集・保存・提供
（国立国会図書館訪中代表団）539 ②：　1- 12
第35回日本法令沿革索引審議会の開催　（調査及び立法考査局）542 ⑤：20
第46回科学技術関係資料整備審議会の開催
（主題情報部科学技術・経済課）541 ④：16- 17

（国立国会図書館 IFLA ソウル大会派遣団）548 ⑪： 1- 10
IFLA ソウル大会プレコンファレンス「アジアにおける資料保存」
（井坂清信）548 ⑪： 2- 7
サテライトミーティング「デジタル時代のリソース・シェアリング、レファレンス、蔵書構築－実践的アプローチ」（北川知子）548 ⑪： 8
アジア・オセアニア分科会サテライトミーティング「21世紀の東アジア学術情報」
（石川武敏）548 ⑪： 9
IFLA ソウル大会プロフェッショナルツアー
（国際子ども図書館企画協力課）548 ⑪： 10
図書館－知識情報社会の原動力　世界図書館情報会議－第72回国際図書館連盟（IFLA）大会　その 2（国立国会図書館 IFLA ソウル大会派遣団）549 ⑫： 1- 24
第33回国立図書館長会議　グローバルな連携を強化する－情報電子化の進展と国立図書館－（生原至剛）549 ⑫： 4- 6
議会図書館分科会および法律図書館分科会　立法情報サービスの現在
（戸田典子、芦田淳）549 ⑫： 8- 9
資料保存分科会関係会議、IFLA／PAC センター長会議　資料保存の現状を知り、対策を選択する（齋藤友紀子）549 ⑫： 10- 12
目録・書誌情報関係会議　アジアからの声を（原井直子、横山幸雄）549 ⑫： 13- 15
子ども・ヤングアダルト図書館分科会　家族をつなぐ読書―架け橋としての図書館
（石渡裕子）549 ⑫： 16- 17
国立図書館分科会　国立図書館　知識社会のダイナミックなパートナー
（植月献二）549 ⑫： 19
政府機関図書館分科会　顧客ニーズ　政府機関図書館・情報センター変革の原動力
（ローラーミカ）549 ⑫： 20
新聞分科会　東アジアにおける新聞（堀越敬祐）549 ⑫： 21
地誌・地図図書館分科会　どちらの名前か？場所の地理的な命名
（樋山千冬）549 ⑫： 22
IFLA 展示会（総務部総務課、総務部支部図書館・協力課）549 ⑫： 23- 24
ソウル点描 549 ⑫： 7，18

一般記事（太字は巻頭記事）

アジア IFLA/PAC センター長等会議および公開セミナー 541 ④： 4- 13
公開セミナー 「スマトラ沖地震・津波による文書遺産の被災と復興支援」
（井坂清信）541 ④： 5- 9
アジア IFLA/PAC センター長等会議（那須雅熙）541 ④： 9- 13
インターネット情報の収集・保存に関する実験事業の終了と今後の取組みについて
（関西館事業部電子図書館課）546 ⑨： 10- 14
英国図書館の複写サービス（大古志帆里）546 ⑨： 4- 6
「描かれた動物・植物－江戸時代の博物誌－」展を監修して
（磯野 直秀）539 ②： 20- 23
「賀屋興宣政治談話録音」および「市川房枝政治談話録音」の利用提供開始について
（主題情報部政治史料課）538 ①： 18

『国立国会図書館月報』年間索引

― 平成18年（2006）1月号～12月号［No.538～No.549］―

凡　例

項目別に配列し、各項目の中は、論題・記事名の50音順、次いでアルファベット順である。ただし連載記事は原則として掲載順に配列した。

特集はあるテーマについてまとめて掲載している形式を含み、特集名をゴシックで表した。

（記載例）

第35回日本法令沿革索引審議会の開催　（調査及び立法考査局）　542 ⑤：20

記事名　執筆者名　掲載号　掲載月　頁

項目一覧

特集記事 …… 53
一般記事 …… 52
NDL news　当館の最近の動き …… 50
＜お知らせ＞・各種案内記事 …… 49
国立国会図書館の編集・刊行物 …… 47
稀本あれこれ …… 47
本を魅せる　常設展示案内 …… 46
電子図書館サービスのページ …… 46
関西館の資料紹介 …… 46
ビジュアル国立国会図書館博物館 …… 46
本屋にない本 …… 45
館内スコープ …… 45
常設展示のお知らせ …… 44
法規等の制定・改正 …… 44
おもな人事 …… 43
遠客近客 …… 43

特集記事

国立国会図書館関西館の電子図書館サービスの展開
（関西館事業部電子図書館課）542 ⑤：　1- 18
近代デジタルライブラリー事業における明治期刊行図書の著作権処理の結果について
（関西館事業部電子図書館課）542 ⑤：　2- 6
電子展示会のこれまで　（主題情報部参考企画課）542 ⑤：　7- 11
第2回レファレンス協同データベース事業参加館フォーラム報告
（関西館事業部図書館協力課）542 ⑤：　12- 18
国立国会図書館の行政・司法各部門図書館ネットワーク－支部図書館制度について－
（支部図書館・協力課）545 ⑧：　1- 11
支部図書館紹介　545 ⑧：　9- 11
宮内庁図書館　545 ⑧：　9
総務省統計図書館　545 ⑧：　10
外務省図書館　545 ⑧：　11
特集　納本制度　（収集部収集企画課、国内資料課）547 ⑩：　1- 13
図書館―知識情報社会の原動力　世界図書館情報会議－第72回国際図書館連盟（IFLA）大会　その1　「アジアにおける資料保存」プレコンファレンス等

ビジュアル国立国会図書館博物館

No.8

ホーレン

大きさが幅30mm、長さ180mm、厚さ３mmくらいで、先の尖った特殊なへら。靴べらを分厚くしたような形状。竹製で、紙に折目をつけたり、糊付けをした表面を擦ったりする際に用いる。

写真１

資料提供部図書課の業務のひとつに、新刊図書にラベルを貼り、利用できる状態に整えるというものがあります。そのラベル貼付時に活躍するのがホーレン（**写真１**）です。

東京本館では、カバーを取った状態で、図書に請求記号ラベルやバーコードラベルを貼ります。しかし、ただ貼るだけでは剥がれやすく心許ないので、ホーレンでラベルを擦りつけます。ラベルが剥がれると排架・出納ミスの原因になります。そのため、図書課では、一週間に2,000～3,000冊受け取る図書に一冊一冊丁寧にラベルを貼付しています（**写真２**）。年季の入ったホーレンは長い間擦られた結果、赤ちゃんのお肌くらいすべすべになっています。

写真２

ところで、ホーレンという言葉の指すものは資料により異なります。1922年出版の島屋政一著『製本術』※1 には小口を金箔で装飾した後に艶出しをするための「艶箆」として載っています。その後1955年に出版された、間宮不二雄著『図書修理と製本の手引』※2 には、ホーレンとは「紙に折目をつけたり、糊付けをした表面を擦ったり」する際に用いる道具であるとの説明が付いています。しかし、1998年に出版された日本製本紙工新聞社編『製本用語事典』※3 には、「牛骨製のつやベラ」として『製本術』と同じような用途が記されています。図書課で今もホーレンと呼んでいるものは、「竹箆」として前述の『製本用語辞典』に載っています。

呼び名は変わったとしても、歴史を感じさせるこの道具を大切に使用していきたいものです。

因みに、ホーレンという言葉には「南無妙法蓮華経」「菠薐（ほうれん）（中国語でペルシャの意）」「鳳輦（ほうれん）（屋形の上に金銅の鳳凰を飾った輿）」などいろいろな意味があります。外国語からきた言葉とも考えられますが、語源は謎に包まれています。

（奥野（おくの）　諒子（りょうこ））

※1　当館請求記号 022.6-Si353s

※2　同上 022.6-M171t-(3th)

※3　同上 UE2-G2

国際子ども図書館

〒110－0007 東京都台東区上野公園12－49
電話　03（3827）2053
利用案内　電話　03（3827）2069（音声・FAX サービス）
ホームページ http://www.kodomo.go.jp/

国際子ども図書館は、国立国会図書館の支部図書館として内外の児童書とその関連資料に関する図書館サービスを国際的な連携のもとに行います。

利用できる人　どなたでも利用できます（ただし資料室は満18歳以上の方）。
資料の利用　館内利用のみ。館外への帯出はできません。
開館時間　9:30〜17:00
休館日　月曜日、国民の祝日・休日（５月５日こどもの日は除く）、年末年始（**34頁参照**）、資料整理休館日（第３水曜日）
休室日　休館日以外に次の日が休室となります。
２階第一、第二資料室：日曜日
３階本のミュージアム：展示会準備期間

支部東洋文庫

〒113－0021 東京都文京区本駒込２－28－21
電話　03（3942）0122（代表）

東洋学の発展を目的とする専門図書館。
アジア全般にわたる資料・研究書を所蔵しています。

国立国会図書館月報　平成18年12月号（№549）

発行所　国立国会図書館　平成18年12月20日発行　定価231円（税込、送料別）

編集責任者　矢部明宏　印刷所 発売元　有隣堂印刷株式会社

〒 100－8924　東京都千代田区永田町1－10－1
電話　03（3581）2331（代表）
ＦＡＸ　03（3597）5617
E-mail　geppo@ndl.go.jp

〒 140－0004　東京都品川区南品川6－2－10
電話　03（5479）8721（代表）
ＦＡＸ　03（5479）8720
E-mail　cap15650@pop01.odn.ne.jp

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜すいして転載される場合には、事前に当館総務部総務課に連絡してください。本誌517号以降、PDF 版を当館ホームページ（http://www.ndl.go.jp ―「刊行物」―「国立国会図書館月報」）でご覧いただけます。

表紙　中性紙使用
本文　中性再生紙使用

国立国会図書館月報　平成一八年一二月二〇日発行（毎月一回二〇日発行　一二月号通巻五四九号）

NATIONAL DIET LIBRARY MONTHLY BULLETIN

No. 549 December 2006

CONTENTS

Yayohi no Uta in Nakajima Hirotari's dairy
(Random notes on rare books, 466)
Libraries - Dynamic Engines for the Knowledge and Information Society: World Library and Information Congress -
Participating in the 72nd IFLA General Conference Part 2 ····· 1
The 33rd Conference of Directors of National Libraries : Strengthen global cooperation - developments of digitization and national libraries - Yoshitaka Ikuhara ····· 4
Library and Research Services for Parliaments Section and the Law Libraries Section: current trends of legislative information services - Noriko Toda and Jun Ashida ····· 8
Meeting of PAC Directors and meetings related to the Preservation and Conservation Section: to comprehend current conditions of preservation of materials and to select countermeasures - Yukiko Saito ····· 10
Meetings related to cataloguing and bibliography: Voices from Asia - Naoko Harai and Yukio Yokoyama ····· 13
Libraries for Children and Young Adults Section: reading for family bonding - libraries as a bridge - Hiroko Ishiwatari ····· 16
National Libraries Section: national libraries - dynamic partners in the knowledge society - Kenji Uetsuki ····· 19
Government Libraries Section: customer needs - engines for reforming government libraries and information centers - Mika Lawler ····· 20
Newspapers Section: newspapers in East Asia - Keiyu Horikoshi ····· 21
Geography and Map Libraries Section: Which name? geographical naming of places - Chifuyu Hiyama ····· 22
IFLA exhibition ····· 23
Sketch of Seoul ····· 7,18
FY2006 meeting between NDL Librarian and directors of university libraries ····· 26

Tidbits of information on NDL ····· 25
Books not commercially available ····· 28
NDL News ····· 30
Publications from NDL ····· 30
Collections of the Kansai-kan (12) ····· 42
Annual index to National Diet Library Monthly Bulletin, nos.538-549 ····· 53
Visual NDL Museum (8) ····· 54

＜Announcement＞
Special exhibition "The 100th anniversary of the former Imperial Library building" ····· 25
Library closure at the year-end and New Year ····· 34
Exhibition at the International Library of Children's Literature: Look up at the Sky: Children's Books on the Sun, Moon, and Stars ····· 35
Book Sets Lending Service to School Libraries of the International Library of Children's Literature: lending out of "Meet the World" set (suitable for senior children at elementary schools) starts ····· 36
Discontinuance of copying and interlibrary loan services via the NACSIS-ILL and the National Union Catalog Network ····· 36
Extension of operational hours of the NDL-OPAC on the Internet ····· 37
＜Invitation＞
Training program on reference FY2006 ····· 37

NATIONAL DIET LIBRARY
Tokyo